
機動六課のお荷物

ナバター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動六課のお荷物

【Nコード】

N4915Y

【作者名】

ナバター

【あらすじ】

妄想？レアスキル？転生？前世の記憶？

生まれながらにして前世と思わしき記憶と、十数年後までの、それも特定の人物達にまつわる記憶を持っていた少年は、その記憶に疑問と混乱を抱きつつ、それでも大切な仲間の為に持ち前の正義感と使命感に身を委ねる。

例えば自分がどう思われようと、どうなろうと、反面教師になって

でも皆を守る、意地と信念を貫き通せる男になる。

これは自分の行動の良否に迷い、苦悩しつつも精一杯生きる男の物語です。

第一話

はじめまして、僕は灘^{なだ}将^{まさ}臣^{おみ}、今年で九歳になったばかりです。
自分で言うのもなんですが、特に人より優れているような長所や
社会に溶け込めないような人格破綻者でもありません。

ただちよつとだけ自分でも変わってるな、と思う所があります。
人には決して言えませんが、どうやら僕には前世の記憶が残ってい
るみたいなんです、もしかしたら僕の妄想かもしれないので、両親
にも言った事はありません。

「じゃあ続きは将臣くんが読んで下さい」

「…はい？」

あ、まずい…いくら小学校だからと言って授業中に気を抜いてし
まった、前世ではあまり勉強しなかった事を後悔したのにな…。

「えっと」

「32ページの三行目だよ」

読む場所が分からず若干テンパリ始めた僕に、救いの手が差し伸
べられた。

声の主は右隣に座る女子、月村すずかちゃんだ、察しが良い人な
らわかったかもしれないけど、どうやら僕はリリカルでマジカルな
世界にいるみたいです。

職場の先輩や同僚がリリカルなのは好きで、DVDやら漫画を

3日間かけて見せられたからある程度の流れや登場人物は知っているのだけれど、たしかあれって原作があると言ってたし、ここがリリカルなのは世界なのかはまだ分からない。

でも、今僕は小学三年生。確か高町なのはちゃんが魔法少女になる頃だったと思う。僕の妄想でなければ、ですが…。

元々僕はバトル系やSF系アニメが好きだったのですが、戦いは嫌いです、ロストグラウンドの悪魔がいる世界に生まれなくて良かったですが、生で彼の反逆を見てみたかった気もしています…あ、ちなみこの世界にも前世と同じアニメや漫画がいくつか存在したの、きつとそれらはこの世界にはフィクションとしてしか存在しないんだと思います。

月村すずかちゃんのフォローのおかげで難を逃れた僕は、なんとか先生に怒られずに済んだ、もっとしっかりしないとなあ…。

「ありがとう」

「うん」

椅子に座ってから小声でお礼を言うと、さすがちゃんは軽く頷き返してくれた。

この小学校がいわゆるエリートコースである為か、皆どこか小学生らしからぬ知識や態度をしている事もあり、僕は特別目立たずに済んでいる。

成績は中の下をキープ、前世の記憶があるからもつと上位を狙えるのだけれど、何だか卑怯な気がしてテストでは絶対に合っていると確信出来る十問程度をあえてミスして、残りの問題に全力を注いでいる。仮に楽をしても後々困るのは僕自身、それに前世で学んだ

事や後悔した事を無駄にするのは嫌だった。

そして放課後、習い事のある僕はバスから下りそのまま高町家へと直行した。

僕が習っているのはごく一般的な剣道で、まだ九歳という事もあり基礎体力作りが中心のメニューだ。指導してくれるのは学校が終わった高町恭也さん、当初はお金を取ってまで人に教えるような実力はないと言って断られたのだけど、正式な弟子や入門者ではなく、道場を借り恭也さんに保護者兼アドバイザーとして見てもらっていると言う名目で承諾してもらったらしい。

らしいと言うのは僕が親に何とか体を鍛えたいと頼み込み、時間的な問題からも高町家の道場しかなく、同じ学校という事で交流もあったためなんとか首を縦に振ってもらったと親がこぼしていたからだ。

と言う訳で月謝二千元と言う道場の使用料を払い、僕は殆ど毎日道場に入り浸っている。本当は毎日来たいのだが如何せんやり過ぎでしまい恭也さんから強制的に休むよう言われてしまう事があるのだ、成長期なだけにかなり気を使われてしまっているのもある。

「今日のメニューは…今日は基礎だけか」

恭也さんや美由希さん、なのはちゃんが帰ってくるまで高町家には誰もいない、そのため道場に直行し、恭也さんが前もって用意しておく書き置きとメニューに従って練習し、恭也さんが帰ってきたら剣道の技や立ち振る舞いを見て貰う流れになっている。

今日は恭也さんがちよつと遅くなる為基礎練習のみのメニューと言う訳だ。

「よし！やるぞ！」

体操着に着替え一人気合いを入れる、人が見ていない時頑張れなければその人は永遠に頑張る事はできない、前世の自分は努力が足りなかった、だからその失敗は繰り返さない。

準備運動をしつかりとやり、道場の中をぐるぐると走り始めた。前世と言うのは反面教師であり、時に人生のアドバイザーでもある、だから僕は人の見本になれる人間に憧れている、自分の失敗を人に伝え成長を促す、とても素晴らしい事だ。

同時刻、なのはちゃんが魔法少女になった事を僕が本格的に疑う原因の出来事が起きていた。

ユーノ・スクライア、彼のもう一つの姿である怪我したフェレットを、なのはちゃんが発見し、飼うことになったと仲良し三人組の会話を小耳に挟んだ事で知ったのは翌日だった。

「...どうしよう」

昨日、実は助けを呼ぶような声が聞こえた気がした。空耳かと思いきや深く考えなかったのが仇になった。

今日の昼休み、真偽を確認すべくなのはちゃんに話しかけた、内

容は至極簡単で。

フェレット預かったって本当？と何気ないものだ、その問いかけになのはちゃんは、「うん、将臣くんも今度見せてあげるね」と何気なく返して来た。

この世界がこのまま僕の知る通りの流れで進むのならば、僕が関わる必要はない。むしろ下手に関わってなのはちゃん達の未来が悪い方向に変わってしまう可能性が高い。だが、この世界が前世で誰かが考えた娯楽アニメと似ていて、仮に全く同じ道筋や結末を辿るとしても、僕達は自分の意志で確かに生きている、確かな現実が今だ。

だから安易にほうつておいても大丈夫とは思えないし、思いたくない、だけど僕はどうしようもなく無力だ。

「違う…やるかやらないかだ、力がないからっていうのは言い訳だ」

あの人ならきつと生身でも拳一つで戦っただろう、信念を貫き通すのは意志の力だ。

「やろう、出来る事だけやるのなら誰にでもやれる、出来ない事に挑戦するんだ、いや…違うか……出来ない事なんてない、決めつけるな！」

気が付くと僕は部屋から飛び出していた、まずは関わる、そこからだ。

「おや？将臣くん今日は休みだって言わなかったっけ？どうせ昨日もメニユー以上に練習したんだろ？」

「恭也さんこんにちは、えっと…今日は練習じゃなくて、なのはちやんがフェレットを預かったって聞いて見てみたくて」

「なる程ね、なのはなら部屋にいるよ、あがってあがって」

「お邪魔します」

時刻は午後五時過ぎ、約束もなしに来たのは非常なただけ、まだ小学生であり仮道場生という立場を使っでなんとか多目に見てもらう事にした、高町家はすぐ良い人ばかりなのでその優しさに甘えて常識を疎かにしないようにしてきた。

だから恭也さんは突然の訪問に驚いていたけど、フェレットが見たいという言葉聞いて、やはり僕も年相応の男の子と思われたらしくちよつと微笑みを浮かべられた時はかなり恥ずかしくなった。

「なのはー、将臣くんが来たぞ」

「ふえ！？はい！」

やはり驚かせてしまったようだ、無理もないよね。

「ごめんなのはちゃん、フェレットがどうしても見たくなくて」

携帯のアドレス知らないしね、元々奥手の僕は会話はするようにしているけど異性に連絡先を聞く勇気がちよつとない。

「大丈夫だよ、じゃあ私の部屋に行こっか」

「うん」

あ、なのはちゃんの肩にフェレットが乗ってる。普通人懐っこく

ても昨日の今日であそこまで懐くかな？やっぱりあれはユーノ君なのかな？

なのはちゃんの案内で部屋に入った僕は、初めての異性の部屋に来た事と、これからどう二人に関わって行くのか悩みかなり緊張してしまっている。

「えっと…可愛いね、名前はもうつけたの？」

「うん、ユーノ君って言うの」

魔法少女な可能性が上がりました。

「ユーノ君って事はオスなの？」

「そうだよ」

ユーノ君はフェレットになりきっているらしく、僕が撫でてでも嫌な素振りは見せない。元々ユーノ君ってかなり人が良かったし男だからって嫌がったりしないか。

「あ、怪我してるね。野犬かなにかに襲われたのかな？」

「え…あ、うん、たぶん」

嘘が苦手なのか、嘘をつく事に罪悪感を感じているのかなのはちゃんは何時になく歯切れの悪い返事をした。たぶん両方だろう、きつと今頃念話でユーノ君がフォローしているに違いない。

「実は僕さ、昨日練習を早く切り上げて本屋に行っただ」

「え？」

「その途中で、動物病院の近くを通ったんだけど…」

なのはちゃんとユーノ君がピクリと反応した、動物病院や周りの道路の破損は学校帰りに確認した、新聞通りにガス爆発ならば、二人は慌てないと思う、魔法少女の可能性がまた上がった。

「そこでさ、…見ちゃったんだよね」

なのはちゃんに視線を向けると、予期していなかった事態に戸惑っているらしく、視線をユーノ君に逸らしたまま黙っている。

「見たって…ガス爆発？」

きつとユーノ君と相談してとぼける事にしたんだろう、下手に真実を話して僕が本当は何も見てなかったら笑い話にもならない。

「ううん…実は携帯に写真も撮ったんだ、明日お父さんに見せてみようと思ってる」

なのはちゃんの肩がピクリと震えた、ユーノ君はこちらをじっと見つめ威嚇し始める。二人からすれば僕は完全な悪者だ、あえてそう演じているんだから当然だけど、ツライ。

「話してくれないかな？そうすれば、誰にも言わないし、誰にもバラさない」

一分程度の沈黙の後、なのはちゃんは漸く僕に視線を向けて口を開いた。

その表情には僅かに軽蔑の色が見え隠れしている。女の子を驚かして秘密を聞き出す、ああ…この気分となのはちゃんのこの視線は…トラウマになりそう…だ。

その後、なのはちゃんは真実を話してくれた、少なくとも僕はそう思う。

そして”やはり”なのはちゃんは魔法少女になっていた。これから彼女はアニメや漫画、ゲームや小説で語られたストーリー以上に数々の事件を経験し、そして苦しい思いをするのだろう、リリカルなのはと同じ未来なら、だが。

「魔法かあ…僕も使えないかな？」

ここからが本番だ、聞き出すだけならなのはちゃんもユーノ君も脅さなくてもきつと時期がくれば話してくれただろう。

ならなぜ脅したか？それは魔法のノウハウを教えてもらう為だ、きつとこればかりはただ頼んでも教えては貰えないし、リンカーコアがないと言われれば終わりだ。

だが今なら少なくとも教えられないとは言えないだろうし、リンカーコアの問題もクリアしている。

何故なら最初の念話を僕は聞いているからだ、個人ではなく魔力をもつ人間に聞こえるよう広域に響かせた念話、空耳かとも思っただけ確かに聞いた。

だからリンカーコアがないと言われた時、僕は念話が聞こえた事

を材料に眞実を引き出せる。

「それは…えっと、素質というか魔力がないとダメみたい…なの」

「さっきなのはちゃん言ったよね？魔法が使える素質のある人にユ
ーノ君が呼びかけたって、僕も聞いてるんだよね」

再び沈黙、僕の心臓は罪悪感で破裂しそうだった。

第二話

結論から言います。魔法が使えるようになりました、なのはちゃんに嫌われました。鬱だ…。

幸いにも魔力を持っていた僕ですが、ディバインバスターやディバインシューターなど、とてもじゃないですが連発出来ません。

簡単に言えば砲撃魔導師になれる程魔力がありません、魔力変換資質もレアスキルも勿論有りません。

幸い空戦適性はあり空は飛べるのですが、デバイスもない僕はバインドでの援護が精一杯なのですが、なのはちゃんの手伝いはした事がありません、明らかに…避けられています。

「はぁ…駄目だなあ、わかってたのにツライ」

日曜日、魔法の訓練をする為近くの森に来たのですが、学校でなのはちゃんに自然と警戒され避けられてしまっている現状に心が折れそうです…いや、ダメだ。今やる事は少ない魔力での戦い方と技術の向上だ。

「チェーインバインド！」

右手を翳すと同時に足元に魔法陣が現れ、そこから銀色の鎖が出現し狙った樹木に巻き付く。

僕の魔力光は銀、まあ…どちらかと言うとクリアグレーって感じだけ。

「1対1と純粋な支援なら使えるかも知れないけど、僕には向かないかな」

バインドを消し、次はデイベインシューターを一つだけ作り出し、木々の合間を高速で走らせる。

複数出して魔力をバラまく事は出来ない、だから砲撃は最小限、そして必中させなければならない。

「あ…やば！」

操作を誤り樹木に向かって直進してしまうシューターを慌てて止める、だが一瞬遅く当たった樹木が激しく揺れる。止めるのが遅かったら折れていただろう、威力を抑えておいて本当に良かった。

「ん？これって」

樹木の確認に近寄ると、さっきの衝撃で枝に乗っていたらしい青い宝石のようなものが落ちて来た。

スッゴク拾っちゃいけない気がする…。

「で、でも…無視出来ないよね、危ないし」

シリアルナンバー？か…このナンバーって誰が回収するナンバーだっけ……ダメだ、流石にそこまで詳しく知らないや。

ジュエルシード、確か願いを叶えてくれるロストログアなんだよね。

「でも楽しんで叶えたい願いは僕にはないなあ」

とりあえずポケットに……しまつて置いて平気か分からないけど、デバイスないし仕方ないよね。

「で、あんたなのはに何やった訳」

…アリサちゃんに呼び出されました、すずかちゃんも一緒です、なのはちゃんはいません。

「えつと…」

アリサちゃん曰わく、最近なのはちゃんの様子がちょっとおかしいらしい。

そしてすずかちゃんも曰わく、最近僕となのはちゃんのやりとりがぎこちなく、なのはちゃんが僕の話題を避けるようになったらしい。

多分前者は魔法少女になった事が原因だと思うけど、全く僕が関係ないとも言い切れない。

なのはちゃんとの仲が悪化したのは言わずもがな僕が悪い、ただ僕はこれからはちゃんと距離を置くつもりだから仲直りする気はない。

「さあ…僕には分からないよ、なのはちゃん何か変わったかな？」

これまでクラス内での人間関係は良好だった、でも悲しいかな一緒に遊ぶような仲にまで進展した友人はいない。理由は分からないけど昔から人との距離感は良く分からない。

「あんた本気で言ってるの？」

「えっと、なんで怒ってるの？それに変に思ってるならなのはちゃんに直接聞けばいいじゃないか」

「聞いたわよ！でもなのはったら何でもないって言って話してくれないのよ！」

なる程、確かアニメでもちよつと仲違いし始めた時期があっただけ、

「何でもないって言うなら何でもないんじゃない？」

自分で演じているとは言え、このヘラヘラして頼りない男は僕でもつい拳を握り締めたくなるなあ…。

「ッ！あんた…」

「将臣くん…」

「そろそろ休み時間終わるし…いいかな？あ、なんなら僕が聞いてみようか？最近暗いね、それと何で僕避けてるのってさ」

言い切った瞬間僕は尻餅をついていた、自分でも吐きたくなくなるくらいム力つく台詞だっただけにめまいでも起こしたのかと思ったけど、それは間違いだった。

「…酷い、酷いよ将臣くん」

「すずか…将臣あんだサイテーね」

顔を上げると目の前にはアリサちゃんの前に割り込み、右手を振り切ったまま目に涙を浮かべていたすずかちゃんがいた。

すずかちゃんはそのまま逃げるように走り去っていき、アリサちゃんも一度僕を睨んでから追って行った。

「…痛い」

初めて女の子に本気で叩かれた、痛い、ぶたれた頬が、心が、痛い。

その日、僕の信念は今までに内ほど揺らいだ、だけど、折れず、曲がらず、強さを増した。

「どんなに嫌われてもいい…僕が望んだ事が叶うんだから」

とりあえずこの後どうしようか、授業には間に合うけどきつと左頬にはくつきりと手形がついてるだろう。

でも冷やすには保健室に行くしかない、流石にただサボったら家に連絡が行く…でもすずかちゃんは泣いていた、もしかしたら保健室で休んでいるかもしれない。

「教室に行くのが無難だよな」

とりあえず手形を消す為に僕は自分の手で左頬を三回ほど殴った。

平手打ちするつもりが自分への苛立ちかつい拳を握ってしまっていた、ま、まあきつとこれで手形はある程度ごまかせただろう、先

生に聞かれたら…：そうだなあ、ヘディングをミスった事にしよう。

とりあえず今は教室へダッシュだ！僕は立ち上がり走り始めた。きつと、あの後すぐ立ち上がっていれば良かったんだと思う。

僕はまさかすずかちゃんの平手打ちで脳を揺さぶられ、自分の拳でだめ押ししているなんて夢にも思っていなかった。

「うわあああああ！?!」

全速力で僕は階段を転げ落ちた。

「…遅れました」

「遅いですよ将臣くん、早く席に…：きやあああ!?!」

担任の先生が悲鳴をあげた、クラスメートもポカンとした表情で僕を見ている。

無理もない、今の僕は鼻血をハンカチで抑え、階段を転がったせいで白い制服はかなり汚れが目立ち、さっき窓ガラスで見た床殴った左頬と目元は青あざになっているのだ。ちなみに服の下も痣だらけ、右足首は捻ってしまい結局三時間めの授業に10分前後遅れてしまった。

まあ痛みで数分うずくまっていたのが一番の原因なのけど…う

ん、平行感覚を損なった全速力の状態で階段で受け身を完璧にとるのは無理だった。

というか床が堅いので受け身を完璧に取ってもダメージをゼロにするのは不可能だったと思う、受け身つて別に万能技じゃないし、ダメージを減らすだけだし…あ、なに言い訳してるんだ僕は。

「ちょっと階段から…あ、対したないので大丈夫です」

あ、素で話してしまった。ここは泣きながら痛がって情けない男を演じる場面だった筈。

先生が何か言う前にささと席につく、足は痛かったが引きずってしまつと確実に保健室に連行されてしまうので歯を食いしばって普通に歩いた。弱いなあ僕は。

予想外な事に、すずかちゃんはしっかりと授業を受けに来ていた、僕が思っていたよりもすずかちゃんは強かったらしい。

というか鼻血が止まらないんだけどな…ハンカチが真っ赤になってきた…折れてるのか？いや、触った感触は普通だしその内とまるだろう、ただ今にもハンカチの吸収力を越えてノートや教科書に鼻血が垂れてしまいそうだ。

「…これ」

「え？」

隣りのすずかちゃんがポケットティッシュをくれた。本当に、優

しいんだね、すずかちゃんは。

「ありがとう」

遠慮なくティッシュで鼻を塞ぎ手で抑える、鼻にティッシュを突っ込むのは個人的にやりたくない。

授業終了間際やっと鼻血は止まったものの、手やら顔やら血だらけになってしまった僕はそのままティッシュで鼻を抑えて隠す事にした、この時間が終わったらトイレの洗面台で綺麗にしようと思う。

それにしても、なのはちゃんは才能もあり努力も欠かさない子だし、ユーノ君も頼りになる魔導師だ。

僕が手を貸さなければいけない場面など想像出来ない。ここで僕がいくら努力しても足手まといにしかならないって思考はなしだ、やると決めたらやる。

ではどうするか？という最初の問題に戻る訳だけど…やはり地道に鍛えるしかないのは間違いない。どこをどう鍛えるかが問題ななってくる…まず砲撃型魔導師は無理だ、弾丸（魔力）の絶対数が少ないしなのはちゃんの劣化版にもならないだろう。

そこで僕が目をつけたのはベルカ式魔導師だ、撃ち合いが無理なら少しでも身体能力でカバー出来るベルカ式にするべきだ、と。

シグナムさんよりやや万能寄りで、タイプとしてはフェイトちゃんに近くする予定だ。

だがそこでまた問題が…まずベルカ式も何もデバイスがない。次に防御力、フェイトちゃんはスピードがあるからあまり目立ってないけど強度の高いバリアジャケットやフィールドを展開するのは無

理、あれ展開している限り魔力使ってみたし…。最後に威力、こればかりは身体能力ではカバーしきれない、魔力が低いのできつと大技はそうなんでも使えないだろう。

スピードもない、硬さもない、威力もない、舐めてるのか僕は？残ったのは技量の向上と工夫…。でも僕が考えてすぐに画期的な解決策が出るだろうか？正直厳しい…。それなら誰だってエースになれる筈なんだ。

ダメだ！ネガティブな考えは捨てる！考え方を変えるんだ！誰だってエースになれる、努力さえすれば…。きつと見つける、僕の道を。「ち、ちよつとあんたどうしたのよ！？」

「あれ？」

いつの間にやら授業が終わってる、ちよつと考え込み過ぎたみたいだな。

「ああアリサちゃん、いやちよつと階段からね」

「あの、さっきはごめんね将臣くん」

「何かあったわけ？」

とりあえずとぼけよう、下手に許してしまうと仲直りしてしまう。

「あ、僕ちよつと顔洗いたいから」

そそくさと逃げようと立ち上がった僕だったが、失念していた、右足首を捻っていた事を…。

「痛っ」

痛みでしつかりと踏ん張れなかった僕は、よろけた所をすずかち
やんとアリサちゃんに手を貸されなんとか倒れずに済んだ。

「ありがとう、はは躓いちゃったよ」

「嘘、あんた痛いって言ったじゃない」

「言っていないよ?」

「ふうん」

ニヤリと笑ったアリサちゃんが僕の右足を軽く捻った。

「…っ」

「やっぱり痛いんじゃない」

「あ、アリサちゃん!」

このまま保健室に連行されるのはマズい、せめてごまかさないと
ヘタレを演じておけば…。

こうなったら。

「僕の事はほつといってくれ!」

心の中で二人に謝りながら、僕は二人の優しさを踏みにじって教
室から飛び出した。

第三話

あれからまた少し月日がながれた、といっても1ヶ月も経っちゃいない。

あの日、すずかちゃんとアリサちゃんの優しさを拒絶してから僕はクラスでも浮いた存在になった。

僕を気にかけてくれる度にそれを感謝せず、余計なお世話だ、という態度を撮り続けた結果なのはちゃんを含めすずかちゃんとアリサちゃんとは事務的な会話しかしないただの他人状態にまで落ち込んだ。

一方でなのはちゃんとユーノ君は順調にジュエルシードを集め、僕が知り得る限り順調に物事は進んでいる。

なのはちゃんがフェイトちゃんと出会い、そして何度も戦って…そして遂に管理局が介入してきた。

どう関わるべきか悩んだが、多分ユーノ君が僕の事を報告したのだろう、僕はクロノ君に捕まって今はアースラの一室に軟禁されている。

独房でないのはリンディさんの配慮だ、僕がした抵抗と言えばただ逃げるだけだったしね。

ならなぜ僕が軟禁されているか、それはジュエルシードを隠し持っていたからだ。ユーノ君からジュエルシードの見本を見せてもらい知っていた僕は言い逃れ出来ず、なにか野心があると思われた。

もちろん野心はあった、あれを僕がもっていればいつかは管理局が接触してくるとわかっていたからだ、まあ単純に保険の品だった。

「でろ」

「了解」

噂をすればなんとやら、クロノ君が来た。僕は軽薄で頼りなく、そのくせ目立ちたがりやで脳天気、自分には隠された才能がある！なんて思っているキャラをロールしている。

理由としてはワガママを言いやすく、なめられやすく、信頼されないからだ、要は凄く動きやすい。

「なあゝ、いつ帰してくれるんだ」

「君の態度次第だ」

到着したのはブリッジ、今日も艦長のリンディさんの取り調べ、もといお話だ。

期待されないように、だが危険な人物や社会不適格者とは思われない程度に評価を落とす、やってみると案外難しい。

とりあえずヘタレは元々の僕にもちよつと当てはまる気がするの
で、ヘタレを演じているとは言え時折演じずとも同じ結果になりそ
うな気がして怖い。

「おはよう将臣君、早速だけどちよつとお話しましょう。君はなぜ
ジュエルシードを隠し持っていたの？」

「ええゝ？だって願いが叶うって聞いたし」

この場にいるのはリンディさん、エイミーさん、クロノ君、ユーノ君、そしてなのはちゃんと名も知らぬ数名のクルー、自己紹介がないので原作キャラしか分からない。

というよりクロノ君とリンディさんしか自己紹介されていないので、もしかしたらエイミーさんの名前は違うかもしれない。

「なんの願いを叶えたかったの？」

「無敵のヒーロー！せっかく魔法覚えたのに術は鎖出すやつしか使えないしさ、でもジュエルなんたら使えばパパッと強くなれるじゃん」

普通の9歳なら有り得なくもない返答をしたつもりだったのだけど、やっぱりブリッジの空気は冷たくなった、皆少し苛立ってる。

因みに僕はチェーンバインドしか出来ないと思われる、ユーノ君やなのはちゃんに教わった中でこれしか発動を成功させていないからだ。

「君は努力家だったって聞いたのだけど」

「あゝ、道場通いは親が行けっつるさくて、なんか僕が頼みこんだ事になってるし、それに練習見てくれる恭也さんは後半しかいないから適当に流してもバレないし」

リンディさんの目が細められ、なのはちゃんが遂に下を向いた、ユーノ君はそれを慰めるように手を肩に置き、クロノ君とエイミーさんは軽蔑の眼差しを強めた。

道場通いは現在でも続けているが、なのはちゃんとの関係が悪化した現在は僕が罪悪感を感じてしまい少し居心地が悪い。

「何故君はヒーローになりたいの？」

「だってカッコいいじゃん！ねえ、僕もなのはちゃんみたいに手伝わせてよ、今はあんまり魔法使えないけどそのうちスッゴい魔法考えるから！」

誰か僕の代わりに僕を殴ってはくれないだろうか。…クロノ君その握った拳を僕に振り抜いてくれ。

「考えておきます、クロノ後の事は…」

「はい」

魔法と管理局を知り、魔法も多少とは言え使えるからには僕をただ放置は出来ないはずだ。

だが油断は出来ない、なんとか管理局入り出来る流れにしていかないといけない…。

再びクロノ君に連れられ移動したのは食堂、丁度昼食の時間なのでついでに話すつもりなのかもしれない。

「結論から言うと君の協力はいらない、君は足手まといだ」

「そんな事ないって！やって見なきゃ分からないじゃんか」

やっぱり厳しいよね、なのはちゃんも民間協力者って扱いだし、

その後本人の希望と実力を評価されての管理局入りだからね、試験もあるみたいだけど。

「わかったから最後まで聞け、君がどうしても協力したいと言うなら条件がある」

「条件？なにになに？」

何となく分った。実際クロノが言ったのは実力をつけて試験を合格し、正式に管理局入りしろって内容だった、間違っではない。

なのはちゃんやユーノ君は必要だったからこそ、協力者として迎え入れてもらってたのであって、足手まといの協力者はいない。

「えー、試験っていつあるの？」

「三ヶ月後になるな」

この事件中には間に合わないな、多分最終決戦も近い筈、ただ現状僕が使える魔法はバインドが数種とデイベインバスターもどきとデイベインシューターもどき、飛行魔法とプロテクションのような防御魔法のみ、なのはちゃんと持つ魔法の系統は同じだけど、なのはちゃんの弾数が10とすると僕はいいところだ、すぐ弾切れになるだろう。

「とりあえずこれから君の正式なデータを取る、今の内言っとくが君の魔力値は精々Cが良くてBだろうな。因みになのははA A Aだ」

ため息まじりに言い切るとパンを千切り口に運ぶクロノ君、話に夢中になっていた僕もスープを口に運び一口飲む。

「大丈夫大丈夫、きつともう少し成長すればSとかSSSとか行くって！」

それにしてもCが良くてBかぁ、やっぱりそのくらいになるか。予想はしていたんだけどね、

やっぱり3って言ったけど多く見積もって2くらいがいいところかな。

「まあ思っのは勝手だが…多分さほど変わらないぞ、とだけ言っておく」

「ほうへふは」

「パンを食べながら話すな…本当に君は人を苛立たせるのが得意だな」

クロノ君ごめん、そう演じているからね。というかいつかこれが素の自分になってしまいそうでちよつと怖い訳でして…。

その後の測定では魔力値はB、チェーンバインドの発動速度と耐久値、消費魔力などの数値もかなり低い数値を記録した。魔導師ランクで例えると、最低のFにも満たないそうだ。

手を抜いたとは言え、多分本気でやってもランクはCに達しないと思う、先は長いなぁ。

因みに僕の出来の悪さは大体予想していたらしく、特に皆が呆れたりする事はなかった。

その後でリンディさんにダメ元で聞いた訓練室の使用と、クロノ

君に魔法の基礎を教わる事に許可が出来たのは嬉しい誤算だった。危険な力なので中途半端なままではなくある程度使いこなせるようにした方がいいという判断なのだらう。

本当に融通の利く人達で助かった。

「一騎打ち？」

「ああ、ジュエルシードを賭けた真剣勝負だ。君も見ただけ」

測定から3日、執拗に協力したいとクロノ君やリンディさんに頼み込んでいる内に遂になのはちゃんとフェイトちゃんの決着の日が訪れてしまった。

薄々気付いてはいたけど、やっぱり僕が手助け出来るレベルになるのは最低でもこの事件の半年後、闇の書事件の始まるA・Sがいとこだろう。

それに今の戦力ならば十二分に事件を解決出来る筈だ、僕が今やる事は邪魔にならない事、ただそれだけだ。

「僕も見えていい？」

「ああ、まあ君とは魔力差が有り過ぎて魔法は多分手本にはならないぞ」

ブリッジに着くと険しい表情でリンディさん達がモニターを見つめていた。

そう言えば、なのはちゃんの両親を説得したようにいつの間にか僕の両親を説得していたリンディさんの手腕には驚いた。

確かに僕くらいの子が1日でもいなくなったら大騒ぎだ、多分変身魔法とかで僕に化けたクロノ君あたりが同席したんだろうなあ……。僕の両親って高町家に負けず劣らず良い人だし、ワガママもちゃんと意味や考えがあれば承諾してくれる。

「あれがフェイトとか言う子かあ」

「ああ、単純な技量はなのはよりちょっと上だ」

モニターでは黒と白の少女が互いの相棒を構え視線を向け合っている、睨んではいない所を見るとやはりただの敵同士という関係でない事が伺える。

モニターから視線を外し再びブリッジを見渡す、ここにも、なのはちゃん達の所にも、僕の居場所やいる必要性がないように感じられた。

関わるべきじゃなかったかもしれない。良くは覚えていないけど、原作通りのようで現実とは違っている。

「やっぱり速いな」

クロノ君の呟きに我に返った僕は慌てて視線をモニターに戻す、案の定既に同じ年の女の子達の戦いとは思えぬハイレベルな攻防が始まっていた。

スピードを生かし接近戦を挑むフェイトちゃんに対し、なのはちゃんも誘導弾を使い迎撃と動きの阻害を狙い、スキあらば高威力の砲撃を放っていく。

フェイトちゃんも接近戦を仕掛け続けるとなのはちゃんにイメージ付け、雷の槍を使った奇襲と魔力砲を叩き込んでいく。

防御の上から一発で削るなのはちゃんに対し、フェイトちゃんは手数で着実に削っていく、ただなのはちゃんの防御が堅い事もあり五分五分という所だ。戦略や技量はやはり訓練を受けたフェイトの方が一枚上手のようだ。

だがなのはちゃんは切り札を隠し持っているはずだ、もっとも原作通りなら…だが。

焦るな…僕は必ず、必ず力をつける…ただ見ているだけの今を変えて見せる。このままでは終わらない。

僕は無意識に拳を固く握り締めていた。

第三話（後書き）

まだ本編（strikes）が始まらないという罫..

第四話

灘將臣、なだ・まさおみ『PT事件』中結界内に取り残された事から当時民間協力者であり、クラスメートでもある高町なのはと接触。

魔法の存在を知り、将臣少年にリンカーコアが確認された。以後は本人の希望もあり高町なのはと共にユーノ・スクライアの指導を受けつつジュエルシード回収に尽力、その後介入した管理局に民間協力者として行動を共にする。

『闇の書事件』の際には地球におらず、囑託魔導師の試験は受験せずミッドチルダにて魔法学院に一時的に在学し基礎を習得していた。

事件解決後に年末休暇に伴い地球に一時帰還、その一週間後に発生する闇の書の欠片による『闇の欠片事件』に立ち会い、事件解決に協力した事で陸士部隊への将来的な入隊が決定、小学校卒業と同時にミッドチルダに移住する。

これが灘将臣という人物に関する経歴データの一部であり、偽りでもあり見方を変えれば真実でもある困った経歴だ。

「いらんとは言えんよなあ…やつぱり」

機動六課、その部隊長である八神はやては本局より送られてきた書類を見て引きつった笑みを浮かべた。

それも仕方ない事だろう、何故ならこの灘将臣と言う男は一言で言い表すならば。

「将臣さんって…あのヘタレですか!？」

自分の仕事を中断しはやての書類を覗き込むリインフォース？。

そう、彼は一言で言うなら「ヘタレ」であり、「雑魚」とも言える。とてもじゃないが書類に書いてある通りの人物ではない、この書類だけみるとまるで事件解決に貢献した優秀な魔導師のように見える。

が、実際に彼は足手まといにしかなくていない、PT事件では常にユーノとなのはの裏に隠れ、唯一可能なチェインバインドは拘束力が弱く発動も遅い、しかも彼は飛べず、ジュエルシードで変異した動物にまるで歯が立たないのだ。

最終決戦時にも半ば無理やり参加したものの、傀儡兵を破壊する事も拘束する事も出来なかった。

囑託魔導師の試験も二度とほど受験したのだが、フェイトとは違い成績は凄惨なもので、見かねたクロノ・ハラオウンに冗談混じりに進められたミッドチルダの魔法学院留学の話に食いつき、留学し基礎を学ぶが、習得した魔法は相変わらず申し訳程度のものだ。

が、本人が管理局入りや魔法の使用に楽しさを感じている事から、このまま地球に放置する危険性や本人がミッドチルダに移住する事を希望していた事もありミッドチルダ国籍を取得。

陸士部隊への入隊もコネではないかと囁かれている程に実力が伴っていない。

「そうなんよ、なんで将臣なんかが回されて来たんかわからん」

「ま、まあでもその人がいなくても戦力は十分なのですよ！」

確かにはやての思い描いた部隊に限りなく近い、むしろ理想そのものとも言えるメンバーに六課は仕上がりつつある。

唯一の不安は二人の隊長が目を付けた期待の新人が六課入りを承諾してくれるかという事くらいのものだった。

「そやね。うん、それにもう子供やないし、成長しとるやろ」

はやての願いも虚しく、件の将臣は完全に厄介払いとして六課に押し付けられる程に…残念な実力の男だった。

機動六課が本格的に活動を開始した日、まず最初に行われたのは部隊長である八神はやての挨拶だった、無論六課の隊員達は全員集合し様々な思いを抱きながら真剣に話に耳を傾けている。

ただ一人、腹痛を理由にサボった男を除いて。

（なのはちゃん、フェイトちゃん、将臣知らへんか？）

（えっと…腹痛だつて連絡が）

（あゝ、フェイトちゃん？それ多分嘘…）

（え！？）

（なのはちゃんの言う通りや、多分嘘やな…あんの阿呆）

なんとか表情に出さぬよう念話で会話しつつ情報を整理するはやて、将臣がこの類の行事を良くサボる事をはやては知っていた、フエイトは仮病とは疑っていなかったようだが、なのはとはやては昔腹痛で帰った筈の将臣が街を歩いているのを目撃した事があった。

後日聞いてみると、その日は腹痛で家でずっと寝ていたと平然と嘘をついた、以来将臣の病気や怪我はまず疑ってかかるようにしている。

（そうなんだ…ごめんはやて）

（ううん、フエイトちゃんのせいやないよ）

やっぱり将臣のスターズ入りは考え直した方が良いかもしれない。散々悩んだ末に決めた考えが揺らぐはやて。

だが将臣にはヘリの操縦スキルや整備のスキルもない、しかも紛いなりにも戦闘員として配属された将臣をどこの分隊にも組み込まずデスクワークさせる訳にもいかない。

とりあえず名前だけでもスターズ5として置かなければならない。非常に面倒な、そしていない人材だ。

（なのはちゃん、アイツの事ビシビシ鍛えたってな！）

（任せてはやてちゃん！）

「ツクシヨン！風邪かな？」

同時刻、自室のベッドでウトウトしていた将臣はくしゃみで目覚め大きく腕や体を伸ばす。

魔導師ランク陸戦B、階級は陸士長、保有魔力B、レアスキルなし、魔法形態はカートリッジシステムの安全性が向上した事により爆発的に増えた近代ベルカ式に便乗、デバイスは盾型のアームドデバイス「イージス」、片手剣型ストレージデバイス「グラム」。

グラムには最低限の補助機能しか存在せず、アームドデバイスよりのストレージデバイスに分類され、カートリッジシステムは左手に展開される小型の盾、イージスに搭載されている。

技能の低い将臣は攻撃をグラム、魔法の補助とカートリッジシステムの制御をイージスに依存しようやく中の下、下の上程度の実力を得ている。

因みにデバイスの名の由来を知る者達には完全に名前負けしていると囁かれている。

「そろそろ挨拶は終わったかな？まあいいか、さて…午後の訓練まで時間あるし、地球で取り溜めといったアニメと特撮見よつと」

いざとなれば午後の訓練も腹痛でサボればいいしな、と呟きながらデッキの前にしゃがみ込みDVDを選ば始める。

「ほう、サボリか」

「あんなの突っ立ってるだけで暇だし……………イタタタタ！
腹が突然！」

「どれ？見てやろう」

慌てて小芝居を始めた将臣の襟首を掴むと強制的に立たせ、引き
つった笑みで振り返る将臣の腹に拳をめり込ませる。

将臣の体はくの字に折れ曲がるが、すぐに悶絶しつつしゃがみ込
んでしまう。

「立て、その根性を高町の教導で直して貰うんだな」

「し、シグナム副隊長殿…不法侵入…じゃ…」

抗議しつつ顔を上げる、すると目の前のシグナムは一枚のDVD
をパキンと割って見せる。

「アアアアアアアアアアアアアアアアア！?!」

「うるさい、早く行かないともう一枚…」

「今行く！今行くから待てえええ！」

気力で立ち上がった将臣は素早く上着を脱ぎ捨て訓練服に着替え
る。

「くそう！後で覚えてろよ！」

「早く行け」

メキツと2枚目のDVDが悲鳴をあげると同時に将臣は駆け出していった。

「やれやれ…」

破壊したブラフである新品のDVDを回収し、まだ言い足りないが残りにはなには任せシグナムは部屋を出た。

「ひいひい…ありや？挨拶終わっちった？」

訓練場にへろへろになりながら走って来た将臣は、なのはを始めとしたスターズとライトニング分隊メンバーの視線を受けながら悪びれた様子もなく首を傾げる。

「スターズ5！灘将臣だ、よろしく！」

なのはとフェイトのじと目から逃げる為新人と思わしき四人に挨拶をする、もつとも階級が上とは言え六課でのポジションはフォワード陣と大差がない。

「じゃあ早速訓練、始めようか」

「え？ちよつとなのはまだ俺この子達の名前知らないんだけど」

「はあ…右からスバル、ティアナ、エリオ、キャロだよ」

「了解っ！」

なのはが珍しくぶっきらぼうな話し方になってしまつのは今に始まつた事ではない。

単純に言ってしまうとなのはは将臣が苦手なのだ、それも好きか嫌いかで言えば限りなく嫌いな部類に入る苦手である。

昔から調子が良く反省もしない、ヘラヘラ笑いながら現れては足を引っ張りそれでいて努力はせず、何より平気で嘘をつき責任感はない。面倒な事からは逃げ人に簡単に頼り甘える。

だがなのは達にとって将臣との出会いと触れ合いは人生においてプラスになった。将臣という反面教師の存在が彼女達を奮い立たせる一因になったからだ。「ああはならない」悪く言えばその感情が将臣に知り合つた者の全てが一度は思い自分を見つめ直すのだ。

「えっと…俺も基礎からやんの？」

「たりめーだ、オメエ体力ねえだろ」

苛立つた様子でヴィータが口を開いた、因みに将臣を殴った回数が一番多いのはヴィータである。

「基礎とか誰でも出来るって、まあしゃーないな」

この言葉になのははピクリと反応するが、直ぐに笑顔を浮かべながら訓練メニューの説明を始めた。

そして

「うつぷ…後何周だ？」

「二周です…灘陸士長大丈夫ですか？」

「ぜえ…ぜえ…将臣でいいよスバルちゃん。いやあさつき走って来たから体力が…何時もなら余裕なんだけど今日は体調悪いな」

スバルと将臣の会話に残り三名のフォワード陣はウンザリしていた、まだアップが始まったばかりであり、このランニングも体を温める事を目的とした軽いものだ、だが将臣は既にバテ始めたばかりでなく仕切りに言い訳を口にするのだ。

（この人大丈夫なのか？）

同じ男性という事もあり将臣に少し期待していたエリオの落胆は早かった。明らかに体力が無さそうなキャロでさえ弱音は吐いていない、同じ男として年上の将臣の言動は恥ずかしかった。

「あの野郎もうバテてやがる」

「うん、昔より体力落ちたみたい」

「あ…でもほらお腹痛いって言ってたし、明日はきっと」

流石にフェイトもフォローする言葉に力がない、既に念話でシグナムからサボリだと聞かされてはいたが、いつか将臣も自分のように弱い心を奮い立たせて真面目になってくれると願っている自分がいる。

「フェイトちゃん…大丈夫だよ、これからビシビシ鍛えるんだから」

「なのは…」

「ま、アイツが潰れなければだけだな」

ラスト一周、徐々にエリオ達から離されていく将臣を見ながら三人はそれぞれどうやれば将臣を真人間に出来るのか真剣に考えた。

第五話

初日の訓練から将臣の不甲斐なさは周知の事になった。

フォワード陣はそれぞれの長所を伸ばしつつ、全体的な底上げをする方向で訓練メニューが組まれているのに対し、将臣には長所がなく、全体的な底上げどころかその基盤である基礎から見直さねばならなかった。

「ねえティア？」

「ん〜？」

「灘士ちよ…将臣さんって私達と同じBランクなんだよね？」

蛇口をひねりシャワーを止める、隣りではスバルがキャロの頭を洗ってあげている。

「そうね、まああんたが聞きたい事もなんとなく分かるけど」

「うん、こう言っちゃなんだけど…良く受かったな、って」

今日みた感想ではお世辞にもBランクの実力があるとは思えない、それが本年だった。

「あの人私達みたいにペアで試験受けたらしいわよ、相棒が凄腕がだったんだって」

「それで受かったちゃうんだ…」

「多分アシストに徹したんじゃないの？小型スフィアの攻撃の盾役とか。先上がるわよ」

「あ、うん」

その頃廊下では…

「おっせえな」

「あ、はい」

先にシャワーを済ませたエリオが将臣の愚痴を聞きながら女性陣を待っていた。

フリードと共に大人しく待っているエリオと対照的に、将臣はせわしなく動き周り一向に落ち着こうとしない。

「でも仕方ないですよ、女の方は髪が長いですし」

「スバルと俺達に大差あるか？」

「あ…いや、でも」

エリオ自身なぜこんなに時間がかかるのかわからない為、それ以上のフォローは出来なかった。

「お、来た来た」

「ふう」

スバル達の姿にエリオは静かに安堵の息を漏らした。

そして

「食いきれる気がしないんだが」

「あゝ…大丈夫だと思いますよ？」

「マジで？」

食堂に到着し注文と運搬は任せてくれと言われた将臣が言葉に甘え待っていると、テーブルに何人前か判断出来ない山盛りのスパゲティがスバル達に運ばねてきた、反射的にティアナに顔を向け啞然とした様子が呟いたのだがティアナの発言から注文ミスではないらしい事がわかった。

「はい、まあすぐ分かりますよ」

注文ミスだと思っていた将臣は、いざ食事が始まった時スバルとエリオの食べっぷりを目撃しその食べっぷりと減っていくスパゲティをまじまじと見ていた。

「すげえな…」

「将臣さんはもう食べないんですか？」

「ん？エリオやスバルと違って成長期は終わったしな」

最後の一口を口に運ぶと将臣は立ち上がった。

「んじゃお先！ちよつと見たい番組があるんだよ」

「あ、はい」

「お疲れ様でした」

口に何も入れていなかったキャラとエリオが返事をし、ティアナとスバルが軽く会釈するのを確認してから背を向ける。

「なんて言うか…フットワークの軽い人ですね」

「エリオ、ああ言うのはチャライ、もしくは軽い奴って言うのよ」

溜め息混じりに遠くなった将臣の背に視線を送る、あんな男とチームを組む者、しかもフォワード陣の司令塔としては頭が痛かった。

「ちょ、ティア言い過ぎ」

「事実じゃない」

スバルの苦笑いを軽く受け流しながらオレンジジュースを口に流し込む、まだ知り合った初日だと言うのに印象はお世辞にも良いとは言えなかった。

そして初出勤までの1ヶ月に及ぶ訓練を経て、将臣に対して遠慮や年上という概念が薄れ、だらしがなく頼りない男とフォワード陣の中で認識が統一される事になるとは流石にまだティアナ達は思っていないかった。

「みんな集合、じゃあ朝の訓練ラスト、シュートイバージョンをやるよ、五分間私の攻撃を避けきるか一撃与えられたら終了。だれか一人でも被弾したら始めから、みんなまだ出来る？」

「……はい！」「」

「…はい」

ボロボロながらしつかりと背筋を伸ばし立っているスバル達とは違い、将臣は膝に手を付き顔を上げていない。

この1ヶ月に及ぶ訓練メニュー、どれも将臣は満足にこなせていないのだ、例えば初日…。

「もらったあああ！！って！？固すぎだろコイツ！うおお！？」

訓練でお馴染みの適役となっている疑似ガジェット？型、疑似的に再現されたAMFを持ち、強度も攻撃精度も1対1ならば兎も角数が揃うと並の魔導師では手に負えない厄介な相手だ。

設定レベルを低くしていたとは言え、スバル達はこの後まだつたない自分のスキルと連携を駆使し、初日でガジェット？型を破壊してみせた。

だが将臣は違った、将臣は初日、キャロの償還したアルケミックチェーンの捕縛から逃れた一機に片手剣型ストレージデバイス、グラムで斬撃を繰り出したのだが、その攻撃は呆気なく装甲に弾かれ

レーザーを腹に食らってしまった。

「将臣士長撃墜、そこでじっとしてて」

「いやいや！あれぐらいじゃ墜ちないって！」

非殺傷設定でなければ将臣は自分の薄いフィールド魔法など貫通し、即死していたという事を柵に上げまくし立てる。

バリアジャケットがあつたとしても、将臣が所属していた108部隊から事前に送られてきた防御数値を上乗せして考えても戦闘継続は厳しいダメージを受けたのは間違いなかった。

「これは命令、将臣士長は撃墜。だからそこでじっとしてて」

「チツ！これからだつてのに」

ヤケになかったのか将臣はその場に大の字に寝そべり目を閉じた、スバル達の技能を見る気も反省する気もないという態度だった。

なのはとは一応幼なじみとなる将臣だが、二人の関係はあまり良好ではない。

ジュエルシード事件の際に二人の間には小さな溝、亀裂が入った。その後事件中何度か行動を共にしたが良い印象も仲直りの機会もなく、ただ漫然と時間は過ぎた。

再開したのは闇の欠片事件、偶然里帰りしていた将臣は謎の結果調査に協力、だが結果的に過去思念体に勝てずシグナムに救助された。

その事件から先は偶然顔を合わせる程度の関わりしかなく、こうして同じ部隊となった現在もものは将臣との距離感に戸惑っていた。

只の上司と部下として接すればいいのか、スバル達のように教えずと考えればいいのか、フェイト達同様に友達であり職場の仲間と考えればいいのか。

考えていた以上に実力がなく、いや、実力がない事は問題ではなかった。ないならば鍛えて力をつければいいだけなのだから。

だが将臣からはただ「やる」という言葉だけで本心からのやる気が感じられず、立场上教官であり上司の自分を軽く見ているように感じられた。

そして場面は1ヶ月後に戻る。

「将臣士長無理なら外れてても」

「はっ！余裕だから！」

何とか顔を上げた将臣は左腕のイージスに差し込まれたグラムを抜く、盾と腕の合間に鞘の役割をするスペースが儲けられており、一時的な格納場所になっている。

もつとも盾の全長より刀身の方が長いので刃が盾から飛び出してしまつので完全な格納とは言えない。

「じゃあみんな行くよ、10…9…8」

なのはのカウントと同時にティアナが念話で指示を飛ばす。

まずは初撃を絶対に回避し姿を眩ませる、後は幻影魔法を組み合わせたスバルの奇襲からリズムを作り状況に応じた攻め手を用意する。

だがこの作戦の問題点は将臣が初撃を避けられるかにあった、このボロボロ状態で出鼻をくじかれるのは精神的にかなりキツイ。

（スバル！開始と同時に将臣士長を担いで逃げて、将臣士長を隠したら作戦通りに）

（おいおい俺は荷物扱いかよ！ちゃんと足はあるしそれに俺はクロスレンジ以外なんもできねえぞ！）

（もう時間がありません！とりあえず作戦通りに！）

荷物扱いではなく、本当にお荷物だろうと心の中で毒づきながらティアナは舌打ちしたい衝動をぐっところえた。

「1…スタート！」

「散開っ！」

なのはの合図と同時に無数のアクセルシューターがフォワード陣に降り注ぐ。

案の定回避のタイミングを誤った将臣だったが、間一髪スバルに

抱えられ回避に成功した。

（ま、将臣さんなんで動いたんですか！？今ギリギリでしたよ！）

（避けられると思ったんだよ！悪いなスバル！もう大丈夫だ！）

ビル内部で将臣と別れ、ティアナの指示に従ってスバルはウイングロードを展開する。

「へえ…やるねティアナ」

スバルとティアナの幻影をアクセルシューターで打ち消し、落ちていた様子で辺りを見回す。

なのはは空間把握能力が高く、戦いと訓練で磨き抜かれた洞察力も相俟って奇襲を事前に察知していた。だが。

「え？」

周囲のビルからの奇襲ではなく、何故か一直線に剣を構え走ってくる将臣を確認した時、なのはは一瞬戸惑った。

普通に考えればティアナの幻影魔法だ、空を飛んでいる自分に空を飛ばず、クロスレンジしか攻撃手段を持たない者が真正面から走って来る訳がない。

なら何故戸惑うか？ごく簡単な事で、『将臣ならやりかねない』からである。

「ティアナの作戦かな？」

もし単純な独断行動だったら流石に目も当てられない、いや、幻影魔法かどうか戸惑わせる事まで読んでの行動なら褒めるべきかもしれない。

（アクセルシューターは二発、あれを迎撃するとなると守りが薄くなる…ウイングロードがない限りもし本物でも将臣くんの攻撃は届かない）

跳躍や剣の投擲を想定し高度をやや上げながらなのはウイングロードが背後に展開された事を感じ取り後ろを振り返る。

「でえやあああ！！」

ウイングロードには拳を振りかぶったスバルの姿、それと同時にストライダーのブースター音が右から鳴り響いた。

後ろには将臣、正面にはスバル、右にエリオ。

それらを見たなのはの判断は早かった。

まず考え得るパターンを同時に幾つもシミュレートする。

まずフリードが奇襲、または援護して来る事は確実だ。後方の将臣が幻影だった場合、術中のティアナは攻撃が出来ない。将臣が代わりに奇襲要員になるが周囲のビルから飛びかかってくるか剣を投げる博打しかない。

スバルやエリオ全員が幻影だった場合も同じだ、だがメリットがない。奇襲パターンが絞られる上に稼げる時間も少なくジリ貧だ。

全員本物だった場合、恐らくフリードは上空、ティアナは誘導弾で狙撃してくるだろう。

だがそれはない、自分が避ければスバルとエリオは衝突するだろう、ならばどちらかがタイミングをずらす筈だ。

同じタイミングで同じ場所を狙うメリットはない、この状況なら時間差攻撃が有効なのはティアナなら見落とさない。

（スバルと将臣くんは幻影…多分キャロはエリオのブースト中、エリオの突進からフリードの奇襲、スバルと将臣くんがウインググロッドで挟み撃ち、かな？）

一秒後、なのはの予想通りの展開になるのだが、自分の動きを制限しているのはスバルの一撃を浅いとは言え受け、朝の訓練は終了となった。

ただティアナとスバルのデバイスは遂に限界を迎え壊れてしまった。

第六話

予想していた通り、だが予想よりもずっと早く事件は起きた。

レリック、機動六課が探しているロストロギア。赤い宝石のような結晶は高密度の魔力結晶であり、暴走すれば大規模な被害をもたらす危険な存在だ。

それが今、山岳地帯を走るリニアレールに積まれ、今この瞬間にもそれを回収しようとするガジェットがリニアレールのシステムを乗っ取っている。

この日、部隊長である八神はやては、機動六課初の出動命令を下した。

「空戦タイプ？うん、わかった。そっちはまかせて」

現場に向けて移動中のヘリの中で、なのははシャーリーからの新たな情報と任務の修正を聞いていた。

本来ならばリニアレールのガジェット攻略にはなのはも参加する筈だった、だが空戦型ガジェットが出現した事でそれは叶わなかった。

空戦魔導師でないフォワード陣には荷が重い、何より確実に制空権を確保しなければヘリやスバル達にも危険が及ぶ。

やはり心配だったが、何時までも守ってあげられる訳ではない。

「私は先に行っちゃうけど、緊張しないで、普段通りやればきつと大丈夫。いざとなったら私やフェイト隊長がついてるから、みんな通信で繋がってる、一人じゃない事を忘れないで」

開けられたハッチの前に立ち、風に髪をなびかせながらそう力強く、優しく言葉を言い残したのは走り出した。

「スターズ1、高町なのは…行きます！」

そのまま空へと飛び出し、数秒後眩い桃井の光が発生したかと思うと、その光の中から白い魔導師が飛び出していった。

ヘリのパイロットであるヴァイスはなのはを見送った後、首を正面に戻すついでにフォワード陣とリインフォースを何となく見た。

場慣れしたリイン曹長は情報の整理と作戦の見直し作業中のように真剣な表情でモニターを見ている。

スバルとティアナはやはり緊張している様子だが目には力を感じる。

エリオはどこか怯えた様子のキャロの手を握り、優しく何か語りかけているようだった。

そして、一番気になっていた人物に視線を向けた瞬間、ヴァイスは顔が引きつるのを感じた。

この作戦に参加させるかどうか部隊長や隊長陣が一番悩んだであろう人物、灘将臣。

陸士部隊出身であり管理局入局前からの達と事件に何度か関わっていた経験を持っている。

活躍はともかくその実戦経験がある事で作戦参加許可が出た男、ヴァイスも流石に緊張してはおらず普段通りおちゃらけているとばかり思っていた。

だが違った。

将臣は手を組みそるを口元に当てた状態で固まっている、視線や床に向けられているが明らかに床を見ていない、心ここにあらずという状態なのが一目で分かる。

顔色は蒼白で、硬直した表情とは裏腹に体は小刻みに震えているように見える、決してヘリの揺れだけではない。

ヴァイスは正面に向き直り操縦桿を握った。あそこまで怯えた人間を見た事がなかった、いや、見た事はあった。

だがそれは悲惨なめにあつた被害者や過ちを犯した過去の自分のような、そんな手遅れの状況に陥った人々だけだった。

始まる前からただの恐怖であそこまで絶望的な表情をしている将臣に呆れを通り越し怒りを覚えた。

「っ！おあつし新人共！なのはさんが制空権を抑えてくれるお蔭で安全にポイントまで到着だ！頑張つて来いよ！」

階級は下だが将臣は一応先輩にあたる、だがヴァイスはもう何も言う気にはなれなかった。

「……はい!」

新人達はやはり緊張を感じさせる返事を返しながら、それでも自分に出来る事、やらなければならぬ事に向き合っていた。

キャラもまだ不安を抱えてはいるが、返事はしっかりと返した。

「スターズ3!スバル・ナカジマ!」

「スターズ4!ティアナ・ランスター!」

「「行きますっ!」」

二人の少女がハッチから身を踊らせ、次にゆっくりと立ち上がった将臣がハッチに立った。

「出来ないと思うなら、無理に行かないほうがいいんじゃないか?」

ワザと乱暴で投げやりな言葉を言いながら、もう知らねえ!とほうっておけない自分は隊長達ほどではないがお人好しだと思ってしまう。

「……スターズ5、灘将臣、出る」

ヴァイスの言葉に反応し、振り返って苦笑いを浮かべてから将臣はハッチから一歩踏み出し落ちるように飛び降りた。

「セットアップ」

落ち着いた、だがどこか嘆くような口調で呟いた将臣の体をクリアグレーの魔力光が包み込んだ。

装着した騎士甲冑はスターズでありながら将臣が白を嫌がり、カーキ色を基調とした上着とズボン、黒いインナー、細部も色に合わせた配色がされたものになっていた。

なのはのバリアジャケットをイメージしている為、スバルと似通ったデザインをしており、長ズボンである事以外は特に変わった点は見受けられない。

どことなく、荒野を当てもなくさまよっていきそうなそんな印象を受ける。

ガンッ！と軽い金属音と衝撃音の混じった着地音を出しながらリニアレールに降り立った将臣だったが、その場に片膝をついた着地姿勢のまま動こうとしない。

ガジェットがすぐ襲って来ないのはスバルとティアナが既に戦闘中である為だ。だが発見されるのも時間の問題だろう。

だが将臣は何の装飾もなく、一見鉄の切れ端のようにも見える片刃の片手剣、グラムを抜く事さえしない。

へりの中からずっと悩んでいるからだ。

（おかしいおかしいおかしいおかしいおかしい、なのはさんの台詞はもつとあつたし、キャラちゃんに話しかけてた筈だ…僕の記憶違い？いや…元々僕の記憶なんて只の妄想の可能性が高いんだ、でももし僕が六課に来た事で未来が変わっていたら？本来なら

苦戦はするが誰も死なない、だが本当に未来が変わり始めてるならそうとは限らない、だけど僕が手助けしたとして皆は成長するか？問題の先送りじゃないのか？)

これまで訓練の進行スピードを落とさないギリギリの能力を維持させて来たつもりだった、むしろお荷物である自分がいた分皆は記憶より強くなっている気がする。

だが結局その記憶が信じるに値するものか今でもわからない、何より持っている知識は最初から完全ではない上に途中から完全に途切れている。

そう、ジェイル・スカリエッティを逮捕し事件を解決するまでしか将臣は知らない。そこから先は知らないし、細部も記憶の風化や元々の知識の限界でわからない。

子供時代にノートに思い出せる事全てを纏め、些細な事も全て思い出し次第書き留め毎日読み返している。

それでも記憶が風化しそのノートの内容が果たしてちゃんとした記憶かどうか疑う事がある。

突き進むと決めたあの日から今まで自分を鍛えて来たが、早速変わった現実には決意と判断が揺らいだ。

「エリオ君っ！」

「っ！？」

キャロの叫びが放心状態の将臣の耳に届き、意識を刺激した。

顔を上げると数メートル先で宙に舞うエリオと、それを助ける為に飛び出してキャロの姿があった。

（僕は何分放心していたんだ？）

リインフォースから通信がないとは思えない、きっと耳には届いても頭には届いていなかったのだろう。いや、もしかしたらガジェット？型のAMFのせいで通信が遮断されていたのかもしれない。

「エリオ！キャロ！」

石になったように動かなかった将臣は漸く立ち上がり谷底に視線を落とす、そこには眩い光が広がっていた。自分とは違い、立ち止まらず前に進み続ける少女が出した光だった。

（皆生きている、物語じゃない…だからこそ、僕はどうしたら）

シュキンと金属がこすれる音を響かせながらグラムを抜き、這い出してきたガジェット？型に向かって走り出す。

こちらに気付いていたらしくガジェット？型はアームを伸ばしこちらを捕獲しようと動き出すが、将臣はそれを受けも避けもしない、必要がないからだ。

「一閃必中！うおおおお！」

将臣にアームが届く瞬間、エリオのストラダの強化された一撃がガジェット？型を捉え、真つ二つに引き裂いた。

それを確認した将臣はグラムをだらんと一度垂らし、それから峰で肩を数回叩きながら苦笑いを浮かべた。

「あーあ、俺が倒そうと思ったのによぉ」

「え？あ…すみません」

ガジェット掃討とレリック確保の通信が入ったのはその直後だった。

帰りのヘリの中、将臣はリインフォースにこっぴどく叱られた。

予想通りAMFの影響で通信は荒れていたようだが、雑音としては届いていたらしく、流星になんの返答もしないのは有り得ないとの事だった。

それに一番の問題はスターズFと合流せず、着地したままずっと放心していた事だった。

「聞いてるですか！？」

「聞いてる聞いている、いやぁあれだ…ちょっとぼおっとしてたのは悪かったよ」

「ごめんごめん、と付け足しながら手を合わせ頭を下げる将臣、リインフォースはギリギリと齒軋りし、「もう知りません！この事はしっかり報告するです！」と言って離れていった。

「ふう…」

やっと終わったか、とでも言いたげな溜め息と視線をリインフォースの背中に向けた将臣の頬を何かが打ち抜いた。

乾いた音はヘリの出す音にかき消される事なく響き、視線を向けていた者も視線を向けたものもギョツとした。

「痛たた、これってパワハラじゃない？」

右頬をさすりながら平手打ちを繰り返した人物に視線を向ける、そこには真剣な表情で将臣を見つめるなのはの姿があった。

見つめる、というよりも『睨む』というニュアンスの方が正しいかもしれない。

「どうして…そんな風にしてられるの？」

「十人十色って言葉知ってるか？こういう性格だから俺は」

「…そう、いくら話しても無駄だって。そう言う事？」

将臣は初めてハッキリとした失望と軽蔑の眼差しをなのはに向けられた、以前までは眼差しの中にはそうじゃないと言う期待と、少なからず友人と言う気持ちが含まれていたからだ。

「いくら頑張ったって給料はおんなじなんだ、死なない程度に頑張るのが賢いやり方だろ？」

その場にいた全員の気持ちを代弁し、なのははもう一度将臣の頬

を叩いた、先程よりも強く。力と怒りと軽蔑を込めて。

第七話

リニアレールの事件から2日、僕は2ヶ月の減給処分、停職にならなかったのは実働部隊でいざ人が停職でいませんじゃ意味がないからだと思う。

あの日以来、当然ながら僕への風当たり、というか視線は目に見えて冷めていった。当然だろう、まるで反省も改善しようと努力も見せてはいないんだから。

あの後はやてちゃんに呼び出されたり、シグナムさんに殴られたり、ヴィータちゃんに辞めちまえと言われたり、とりあえず全てが終わってから部屋で自分を殴らずにはいらなかった、我ながら最低の態度と言葉だった。

「ああ言う言葉が思いつくって事は、内心ではそう考えているって事なのかな」

最近こうしてベッドに寝てもなかなか寝付けない、なのはちゃん
の教習も負荷をかけてるからもちろん疲れるし、自主錬も続けてる、
体は疲れてるのに眠れない。

僕がやってる事が間違っているのはわかってる、ちゃんとした実
力を出してしっかり出世していれば救える命はもっと多い筈だ。

でも記憶が忘れられない、ハッピーエンドだとわかっているけど、
知っている自分が知らない顔して無視は出来ない。

でも少なからず関わった事で状況が悪化しているかもしれない、

関わるのを止めるにしても、今更遅いかもしれないし。いや…今なら間に合うのかも知れないけど…わからない。

「どうしたらいいんだ…」

思わず壁に八つ当たりしてしまった。ズンっと鈍い音が響く、ズボツでも良いかもしれない…どうしよう…か、壁に穴が。

「将臣、いるか？」

「シグナム？」

何だろう、わざわざ来るって事は仕事の連絡じゃないよね。

ドアロックを解除して扉を開ける、同時に何故か木等が飛んできた、こう…ひょいって感じじゃなくて、ブン！って感じで…。

「あだ！？」

「拾え、そして準備しろ…特別訓練メニューが組まれた」

流石に予期していなかったフライング木刀アタックは僕の顔面に直撃、鼻血が出た。

「と、特別メニュー？」

「ああ…一応私が教官だ、武器も似ているからな。早くしろ、私も暇ではない」

誰が言い出したんだろう、すっかり見放されたと思ったんだけだな。

「何を泣いている？」

「木刀が痛かったんだよ！」

特別訓練メニュー、誰が考えたのかはこの際考えない事にするとして…ごめんなさい凄く怖いんで止めませんかこの訓練？

「目を瞑るなと言っていているだろう、お前にはまず度胸が足りん。それともお前は目を瞑った攻撃も防御もこなせる天才か？」

シグナムさんの振るう木刀が鼻先数ミリを通過していく、時に眼前、時に急所、背後とつい反応してしまいそんな恐怖を感じる場所をワザと大振りで空振っていく。

（これは…キツイ！）

バリアジャケットでもデバイスでもない、ただの服にただの木刀…殺傷設定でもシグナムさんはレヴァンティンを振るってミスはないだろう、でもこの木刀はどうなのだろうか？今日初めて握ったという訳ではないと思うけど…。

（な、なんでこんな訓練を？）

時折顎の下も通過するので下手には喋れない、多分下手に動くと当たる。

（お前は足が竦んでいたようだからな、それにその後ガジェットに突撃したが、間合いもなにもなかった）

だってあれはエリオ君を感知させない為のアシストだし、攻撃も防御もいらなかったからただ派手に突っ込んで！

なんて言える筈もなく…。

ビッ！

「うおおああ！？袖斬れたああ！？！」

「下手に動くな、体には当てないと言ったハズだが？」

「無理だから！つかこれ訓練じゃなくてイジメだろ！」

「なら辞めるか？」

六課を、という言葉が前後どちらかにつくような気がした。…でも正直怖いよこれ、いや叫んだり演技…だけどさ。

「もっと他のにしようぜ！組み手とか！」

「ほう？」

地雷踏んだ。そう思った時には背中から倒されていた。

木刀を手放し、顎を右手で押しつつ左手は僕の右手を引く、後は右足を僕の両足の後ろに滑り込ませるとあら不思議。重心を後ろに崩された僕は下がる事も受ける事も出来ずに背中から倒れるって寸法だ。

因みにこれを本気でやると後頭部から地面に激突する、そのまま自分の体重も加えれば人は下手すると死ぬ、背中から倒れたのはシグナムさんの手加減だ。

「痛~~~~っ！」

ゴロゴロ転がる僕を見下ろしながらシグナムさんが落とした木刀を構えた。

「セットアップしろ、組み手をやる」

「ぐ…上等っ！セットアップ！」

イージスと騎士甲冑が瞬く間に展開される、グラムは抜かず右手には木刀を握ったままだ。

「はやくそつちも甲冑出したほうがいいんじゃないか？」

「いや、…これで十分だ」

ですよね。っと、「冗談言ってる場合じゃないよね…ここはしっかり！」

「舐めるなああ！」

「遅い」

上段に構えた木刀を振り下ろす前に、シグナムさんの強烈な太刀筋が騎士甲冑ごしの胴にめり込む。

「がふっ！？」

薄いとは思ったけど、騎士甲冑の強度あつて無いようなものじゃないか！

胃からこみ上げて来たものをなんとか喉で留め、再び胃に押し返すと同時にようやく一時的に止まった呼吸が再開された。

「どうした、終わりか？」

「い、今のはレディーファーストの精神をつい出したただけだ」

これはとても勝てない、レベルが違うぞ。

「ならばもう遠慮はいらんぞ、来い」

「でえやあああー！！」

でもこれは太刀筋や返し方を見る良いチャンスだ、僕とどう違うか検証出来る。

渾身の力で放った突きは、シグナムさんが右手前に一歩踏み出した事で呆気なくかわされる。

間合いを詰める速度と詰めてくる距離が洒落にならない！

突きを引き戻す暇なく再び胴に木刀がめり込む。予想していた為吐いてしまう事はなかったが、鈍い痛みと共に再び呼吸が止まる。

「んの野郎オ！」

だがそれでも構わず左手で胴を打った木刀を掴み、卑怯だとは思いつつも全力で木刀を横一閃に振る。

「苦し紛れか…醜いな」

屈み込み余裕を持つてその攻撃を避けながら、シグナムさんは体を捻って木刀を引き抜く。片手でそれに対抗する事は出来ず、重心を崩され二、三步前に踏み出してしまう。

「せい！」

捻りの勢いをそのままに横に一回転した鋭い太刀筋が三度目の胴に吸い込まれていく。

もう騎士甲冑の有無も予想も関係ない、今までで一番強烈な衝撃と痛み、そして吐き気に襲われた僕はそのまま倒れ込んだ。

「ここまでにしよう、やる気があるならまた明日この時間にここへこい」

失望も期待もこもっていない淡々とした声、「仕事でやっている」そう言われたのと同義の声色だった。僕が望んだ影響力が少なく、見ていられる立ち位置、そこに立った事を実感した。

だからこそ、目を瞑り、齒を食いしばっていなければ泣いてしま
いそうだった。

（待って下さい、僕は…僕の力はこんなじゃない！こんなじゃ
ないんだ！）

決して言葉にも念話にも出来ない叫びが頭の中でこだました。

本当はなのはちゃん達と仲良くしたかった。

本当は活躍したかった、一緒に戦いたかった。

でも…それが皆の成長や、戦いの邪魔になってしまったら？未来
が悪い方向に変わってしまったらどうしたらいい？

関わらない方がいいんだ…でも、僕の記憶を信じるのか？少なく
とも今は殆ど順調だ…そう、『殆ど』。

『闇の欠片事件』、まずそれがおかしいんだ…あれは確かゲーム
オリジナルの筈だ、いわゆるifやパラレルワールドの話だ、だか
ら僕が知っている未来とは分岐してしまう可能性が高い。

それにゲームでは皆は勝ったけど、実際にリインフォースやマテ
リアル、過去とは言え守護騎士やなのは達、それらに勝てると思

えなかった。

いくら過去の自分達より強くなっていたとしても多勢に無勢、負けは目に見えていた。

あの日、休みを利用して僕は地球に帰った。闇の書事件に関わらなかったのはミッドでデバイスの入手と、魔法についての知識をしっかりと学びたかったからだ。

そして『闇の欠片事件』は行った。もちろん僕も参戦した、本気だった。

五ヶ月間授業を殆どサボって漸く手に入れたストレージデバイスのグラムと、インテリジェントデバイスのイージス、もつともこの時の2つは外見こそ変わらないものの中身はかなり旧式でシンプルなものだった。

いわゆる骨董品だ、まともなデバイスなんて手に入る筈もなく、使えそうなジャンクパーツや古代ベルカ色のデータを集めてはデバイスマスターの元に足を運んでなんとか実用段階まで仕上げてもらったものだから使用者の事やスペックなんて二の次だった。

グラムは斬れば、イージスはカートリッジシステムさえあれば良かったからだ。

僕が戦ったのは王のマテリアル、相性が良かった事もあった撃破に成功した、ただカートリッジシステムの負担で体はイカれた、グラムを振る右腕と砲撃魔法を使う左腕は特に酷かった。

その後だ、なのはちゃんの思念体と遭遇した、泣いていた…。

結果的に僕を避けた事、中途半端に巻き込んだ事をひたすら謝ってきた。僕は精一杯謝罪をして、それから目を閉じたのはちゃんにグラムを突き立てた。

夢から覚めたら仲直りしようと思った僕は嘘をついた。

最後に戦ったのはフェイトちゃんの思念体だった、勝てる見込みはもうなかった。

事前に用意していたカートリッジはまだあったのだけど、やはりガラクタ同然のデバイスには無理があった、カートリッジロードと同時にイージスは魔力を処理出来ず暴発してバラバラになった。

盾と唯一の生命線を失った、右手はバインドで無理やりグラムを握らせていたけど、フェイトちゃんのスピードの前に傷ついた僕は成す術がなかった。

死を覚悟した時、助けてくれたのがシグナムさんだった。シグナムさんもボロボロだった。

後から聞いた話では、マテリアルを始め思念体の攻略には多対一で望んだらしい、だがなのはちゃんやフェイトちゃん、リインフォースを模したマテリアルの力は圧倒的だったらしい。

フェイトちゃんに似た力のマテリアルが満身創痍で逃げ、それを追っている時にたまたま僕がいた結界を見つけたそうだった。

マテリアルを倒せば思念体は消える、逆にマテリアルがいる限り思念体は増える。シグナムさんはフェイトちゃんの相手をせず目眩ましに一度大技を使ってから結界の外に出た。

僕がアースラに治療の為収容されたのと、マテリアルの全滅したのは殆ど同時だった。

きつと、僕が余計な事をしなくとも皆は勝ったのだろう。そんな事を感じたのを覚えている。

以降僕は体にリミッターをかけた、静養の為だ。

僕はカートリッジシステムを扱えず自爆した事にした、カートリッジシステムの危険性をもう一度考えて欲しかったという理由もある。

そのおかげかわからないけどなのはちゃん達はシャマルさんから定期的に検査を受けて、あの墜落事故を防ぐ事が出来た。

傷は負ったもののなのはちゃんは僕の知るような重傷ではなくなったのだ、でもなのはちゃんや周りの人達は無茶させてしまった、してしまった事認識をしたようだった。

これは改善だったのか、歪めてしまったのか、僕にはまだわからない。

第八話

灘将臣、彼の事を考えるといつも溜め息が出る。

何を隠そう六課に彼をねじ込んだのは僕だ。もっとも彼は最悪犯罪紛いの手段を使つてでも六課に転属する算段だったらしいが…。

彼への印象は出会った頃からあまり良い物ではなかった、今でも彼の考えは理解出来ない。そんな僕が彼の六課入りに協力したのは七年前の会話が発端だ。

（クロノちよつと訓練したいんだ、良いか？）

（ん？ああ別に構わないが…）

（ありがとう）

「訓練にクロノ借りて行きます！」

「ちよつと出て来るよ」

「あら？せつかくのお休みに珍しくわね二人共」

「クロノ君やりすぎちゃダメだよ？」

「わかつてるよエイミィ」

この日は長期休暇で地球にいた、珍しく将臣も地球に帰還していて、これまた珍しくやる気を出したのかと少し驚いた。

「で、なんでまた突然やる気になったんだ？」

「その前に結界を頼む、俺張れないから」

街の一角に結界を張り一応その前にエイミィに念話で結界の事を伝えておいた、思ったより本格的にやるつもりのようなのだ。

「これで通信は通らないね。…ふう、ごめんねクロノ君せっかくの休暇なのに」

「どうした突然、君がそんな事言っと少々気味が悪いな」

「単刀直入に言うよ、僕はこの先の未来をちよつとだけ知っている。その未来を変えたくない、だから見守れるポジションにいたいんだ。その為に協力して欲しい」

「…馬鹿な冗談で僕をからかうなら僕は帰るぞ？」

「そう思つのも無理ないよね、けど事実なんだ、君はそう遠くない将来はやてちゃんを部隊長にした部隊設立に力を貸す。クロノ君が協力してくれば部隊入りは難しくないんだ」

とりあえず話だけ最後まで聞いてやろう、そう思つた僕は将臣が話終えるまで黙っておく事にした。

「信用出来ないよね？逆の立場なら僕も信用出来ない、だから手合わせしよう。実力があれば、問題ないと思うから」

そう言つて将臣はセットアップした、将臣の騎士甲冑の性能はかなり低い。今は武装隊のアンダーウェアをイメージした甲冑のデザ

インにしている、理由はデザインを考えるのが苦手だからなんだそう
うだ。

「デュランダル」

続いて僕もバリアジャケットを装着する、最後に将臣と手合わせ
したのはいつだったか？実力は言わずもがな平均以下だった。

そう思った僕を責められる人がいるだろうか、彼と行動を共にし
た者なら誰もが負けるとは思わないはずだ、何故なら彼はそう思わ
れる實力しか見せていなかったのだから。

だから僕もその時は一撃で終わる、そう思った。しかし出だしか
ら予想を覆された。

「な！？」

「どうしたの？」

「な、なんで飛べるんだ！？」

たしか将臣空は戦適性もなくユーノやなのはが教えても飛べなか
った筈じゃないのか！？

「なのはちゃんやフェイトちゃんには敵わないけど、僕も戦えるん
だよ」

ガシヤンとカートリッジが一発ロードされ、盾の側面から薬莖が
排出された。

「カートリッジでドーピングすれば、僕でもそこそこ戦える！行けアクセルシューター！」

「なんだって！？ちゃんと説明を……く！ステインガー！」

五発生み出した誘導弾で向かってくる二発のアクセルシューターを迎撃する、カートリッジをロードしたにしては威力はなのはの通常時よりやや低い。

「アーク！」

っ！そうか、今の誘導弾は基本魔力、この追撃にカートリッジの魔力を使ってるのか！

とつさにバリアを張り、同時に空間固定型のバインドを詠唱する。場所は僕の背後、不意打ちに対する罠だ。

「セイバーッ！」

グラムの刃に上乗せされたクリアグレーの魔力刃が太刀筋にそって打ち出される、フェイトが良く使う技だ。バリアに噛む性質がありなかなか消えないので本来は避けるべきなのだが、生憎油断していた僕にはその余裕がなかった。

「今まで手を抜いてたのか！なんの為だ！」

「僕がでしゃばるのは危険なんだ」

「なんだって？一体どういう！」

アークセイバーを受け止め、動けなくなった僕を背後から攻撃す

るものだと思っていた僕は完全に裏をかかれた。

「バリアブレイク!？」

罨を張っていた事でまだ僕は油断していた、将臣はアークセイバーを受け止めているバリアに左手を押し付けた、そして次の瞬間にはプログラムに外部から割り込まれたバリアが簡単に砕けた。

「紫電…一閃!」

グラムを振りかぶっていた将臣は一気に二発カートリッジロードした、確かにこの間合いなら一番有効な技だ。

(どれだけ魔法を盗んでいるんだ!?)

ギリギリの所でデュランダルでのガードに成功した僕は高度を上げ間合いから離れる、ベルカ式相手にクロスレンジでやり合う必要はない。

「斬れなかったか…やっぱり魔力変換資質がないと時間がかかるし威力も出なや」

グラムが纏った炎はカートリッジ数を考えても弱い、シグナムは一発のロードであれの二倍の火力は出すだろう、もし今のがシグナムならデュランダルを斬られていただろう。

「わかった、手加減はいらなないみたいだな。小手調べはもういいな」

「僕は精一杯の不意打ちだったんだけどね」

きつと将臣は僕らの魔法をあらかじめ習得している筈だ、やたらと色んな魔法をしりたがっては失敗していたのは演技だった訳か。

（現時点：いやこれから先もクロノ君には勝てないかもしれない、だから実力も手の内も知られていない今しか勝つチャンスはない、勝てばきつと信用して貰えるはずだ）

「イージス！カートリッジロード！フルドライブ！」

イージスに一度に装填出来るマガジンは三つ、全部で三十発。今はまだ一度に五発までしかロードした魔力をコントロール出来ない、いつか一気に三十発ロードをものにするつもりだ、出ないとなのはちゃん達を手助け出来るような力は出せない、基本魔力の低さはどうしょうもない。

「雷光一閃！ジェット・ザンバーッ！」

「エターナル・コフィン！」

劣化版雷の剣が闇の書の防衛プログラムさえ凍結させる氷と正面からぶつかる。

本来なら勝ち目はない、だけどクロノ君の詠唱を破棄し急遽発動させたエターナル・コフィンは本来の威力を発揮していない。

「イージス！カートリッジロード！」

無茶だ。僕とクロノ君は同時に思った、だが僕は止めなかった。押し返される雷の剣を届かせる為、断続的にカートリッジをロードする、制御は追いついていない、だが今はそれでもいい。魔法は発

動した、魔力刃に回す魔力と体を強化する魔力に大ざっぱに分ければいい、体には痛みが走ったが止める訳にはいかない。

「ん……久々にぐっすり眠れたなあ」

なにか懐かしい夢を見たような気がした、唯一自分の实力を知る人物とのやりとりだったような気がする、なんで今更思い出したのだろう、やはり誰かに評価して褒めて欲しいのだろうか。

僕自身もつと違ふやり方があつたとは思ふ、一重にこの道を選んだのは自信の無さ故だ。

全てを話して避けられるより、期待されてそれを裏切るより、最初からなにもない方が楽で、何より無くすものではなくて済んだ。

これは自己満足でとてつもなく楽で迷惑な人生を歩んでいる。記憶なんかなければ僕はただなのはちゃん達の友達でいられたかもしれないのに…。

あ…早く朝練行かないと…。

「あれ？早過ぎたかな…」

まだ訓練所には架空の建造物すら展開されていない。

「ああ…一時間早くアラームかけてたんだっけ」

最近寝付きが悪いので夜練を止め、寝る努力をする時間に回した、故に今日から朝練の前に秘密の朝練をする事に決めたんだった。

ここで何かやると熱中して人が来るのを忘れそうだ、イージスと魔法のプログラムを弄ろうかな。僕は創作力があまりないから使ってる魔法は他人が作ったものばかりだ、魔力はプログラムだからデータと条件さえ満たせば使う事が出来る。

僕が使えないのはスターライト・ブレイカー、苦手なのは魔力変換資質が必要な魔法だ。

紫電一閃もジェット・ガンバーも発動時間や消費魔力をかなり使う、威力も本家には敵わない。それでも使ってしまうのはベルカ式の戦闘スタイルに合うからだ。

「収束砲はとても実用出来ないからなあ」

やろうと思っただけで五分以上かかる、実戦で使用出来るレベルじゃない。

「イージス、リミッターを解除しても平気かな？ほんのちよつとだけいいから」

帰ってきた答えはNOだった、僕のリミッターはなのはちゃん達とはちよつと違う、魔力ではなく魔力で体に制限をかけている。闇の欠片事件意外にもちよくちよく続いた無茶のツケだ、それをイージスはいざという時に力を発揮する為に私生活や訓練ではこれ以上のリミッター解除は控えた方が良くと判断されたようだ。

「そうだね、それじゃなくても訓練してるから体力は使ってるからね」

スカリエッティ逮捕まで持てばいい、そのつまりで体力配分している。多少の無茶をしないと力にはなれない差が存在するからだ。

なのはちゃん達がやっているのが長距離走だとすると、僕はある区間だけ付いていこうとする短距離走だ、だから燃え尽きる気で体を酷使出来る。

「無駄な話をし過ぎたね、バインドの発動短縮を模索しようか」

様々なバインドのプログラムを検証し、より自分に合い、尚且つ効率的で効率化出来るようなものを探る、これをやるとあつという間に時間が過ぎる。行為作業は好きだ、なにか宝探しをしているような気分になれるからかもしれない。

「あ、変換資質が必要なヤツは除外しようか、攻撃は攻撃で分けよう。僕が欲張ると中途半端になるだけだからさ」

まだ冷たい朝の空気がとても心地よかった。案の定なのはちゃん達が来たのに気づかない程僕は宝探しに没頭してしまい、ギリギリの所でイージスに教えてもらい事なきを得た。

「おはー！みんな遅いぜ寝坊かあ？」

久々に清々しい気分だったからかもしれない、いつもより余計に声を大きくしてしまった。

第九話

現在時刻1400、午後の訓練の真つ最中だ、内容はほぼ恒例となっている対ガジェット戦。

今回はガジェット？型20機の捕獲及び破壊が目的だ、動きや攻撃精度の詳しい数値はわからないけど、以前と比べ明らかに強くなっている事は確かだ。

現在の撃破スコアは1機、僕は基本的にスバルちゃんとの同時攻撃が基本なので攻撃パターンは一番少ない。

「ハア…ハア…」

マズいな、そろそろ本気で体力の限界が近いかな…個別訓練が加わってから更にハードだ、回復より消耗の方が上回って来てるな。

（スバル！そちに追い込むから手筈通りお願い！将臣士長もお願いします）

（OKティア！）

（了解だ）

やっぱり階級も上、年も上だとティアナちゃん的には指示し辛いよね、実力は下だから余計に使いどころに困るし。

ビルの影に隠れていた将臣は念話で聞こえるティアナのカウントに合わせグラムを握る手に力を込める。

相変わらず目立った成長が見られない将臣だが、それでも最低限の役割をこなせるのはティアナの指示と仲間との連携があればこそだ。

（3…2…1…今！）

「リボルバアアア！シュート！」

「空牙！」

間合いに入ったガジェット？型の進路に同時に飛び出し、互いにカートリッジを一発ロードした衝撃波攻撃を放つ。

将臣の使った技はシグナム直伝であり、将臣用にアレンジされた魔法だ。一度イージスに納めたグラムをカートリッジロードと同時に居合いの要領で抜き放ち、衝撃波の斬撃を打ち出す対AMF用に使えるとのシグナムの心遣いだ、何より魔力変換資質が必要のない単純な魔法の為将臣も体得出来ると踏んだらしい。

スバルの撃ち出した衝撃波は三体のガジェットを粉碎し、将臣の衝撃波は二体を行動不能にした、完全に破壊しきる威力は出ていない。

「ティアごめん！一体討ち漏らした！」

「悪い俺だ！間合いが遠かった！」

慌てて引き返したガジェットを追おうとするが既に足にきていた、しっかりと上がっていなかった足は瓦礫に躓き転んでしまった。

（大丈夫任せなさい！）

慌てて体を起こしながら離れていくガジェットを見る、スバルも既にウイングロードで後を追っている。

だがスバルが追いつくより先に狙撃ポジションに移動していたティアナの多重弾殻射撃がガジェットを貫いた、恐らく前もって討ち漏らしのフォーローに回っていたのだろう。

「さっすがティアア！」

「ま、当然よ」

グラムをイージスに納め立ち上がる、訓練が終わった事でアドレナリンや集中がキレたのかどつと疲れが押し寄せて来るのを感じた。「何はともあれこれでお終い、だよな？」

独り言のように呟いた言葉には誰も反応しなかった、別に無視されている訳ではなく普段から愚痴や文句、弱音など独り言を言う頻度が高いからだ。

「みんなお疲れ様、今日の訓練はここまでにしようか」

空からモニターしていたなのはちゃんが降りて来た、別ルートでガジェットを待ち構えていたスバル君とキャロちゃんも直ぐに合流した。

「今の訓練の反省と良かった所をしっかりとイメージしてね」

元気、とは言えないが負けじと元気なスバル達に合わせて返事をする。

「あ、将臣士長はちょっと残ってくれないかな？」

「え？ああ…了解」

なんだろう？思い当たる節があり過ぎる。

互いに騎士甲冑とバリアジャケットを解除し、皆が先に行つたのを見計らつてなのはちゃんが口を開いた。

「訓練…これからもつと辛くなるよ、将臣君は大丈夫？」

別に馬鹿にしている訳でも皮肉でもない、純粹に心配してくれている。

「平気平気、体力はかなり付いて来たし！」

なのはちゃんは相手が困っていたら手を差し伸べる子だ、だから僕はずっと昔から同じ表情で、同じ視線で答える。「ほうつておいてくれ」それが僕の願いだときつと気付いているのだろう。

本当に悲しい目も、弱い表情も、決して見せない。辛いと思う事はあるけれどやっている事は簡単だ、信頼される人間になる力が無い癖に、わざと信頼されないよう振る舞つて自己満足なのだから。

「…将臣君は昔言つてたヒーローになれた？」

「これからなるんじゃないか？」

ヒーロー、なれる事ならなつてみたい。

「そつか、ごめんね時間とらせちゃって」

「別に、お喋りは嫌いじゃないし」

なのはちゃんは何かもつと別の事を言いたかったのかもしれない、でも僕は彼女に謝られるのが嫌だった。謝る事なんてないんだから。

なのはちゃんと別れた僕は遅めのシャワーを浴びた、あの後座つたら膝が笑って立てなくなってしまったからだ、我ながらかなり情けない姿だった。

「ただの一般人レベルなんじゃないのかな…これ」

見た目には結構鍛えていると思う身体、抑えているとは言えそこそこやれると思っていた自分について苦笑いを浮かべてしまう。

元々人間が使ってるのは30%の筋力、それを更に抑えればそりや平気を下回るのは当然だ。魔力の強化がなければ訓練にはとてもついていけない。

とは言えリミッターなしでも実力はA A。…A Aは言い過ぎかな？うん、言い過ぎだよな。測ってない事を良いことに僕は高望み中である。保有魔力Bだから持久力もないのにさ。

以前クロノ君に実力を隠して嫌われ役を演じる理由を聞かれて僕はこう答えた。

「僕が表だって手を出す事で未来が大幅に変わるかもしれない、それに戦力が増えれば人間だれでも油断するよね？それで皆の実力が

知ってる未来より低くなったらダメなんだ」

そんな人達ではない、そう信じ切れずネガティブな道を選ぶのは僕の悪い所だ。

「それに期待されたくない、答える自信がないから……。でも全く関わらないくらいなら反面教師になった方がいいと思っただし、ほら、いざ死んだ時に嫌な奴なら悲しみも少ないから」

この時はクロノ君に殴られそうになった、それも当然かもしれない。

でもさ、中途半端な力と知識でなのはちゃん達と戦って手助け出来るなんて思考はできなかった。

それは本当に手助けになるのか？ 助けてるって自己満足じゃないのか？ もちろん僕がやってる事もその意味では自己満足だ。

そういう道を選べなかったのは僕がおかしかったからだ、だってそうだよ。

短いながら僕には二人分の人生と記憶がある、おかしくならぬ方がどうかしてる。僕は僕が嫌いだ、無責任な責任感と正義感を持つ僕と、自分に自信が持てない僕が共存してるんだ。

その二人が互いに考えて選んだ妥協点が『今の現状』だ。

ほうっておけないけど力を貸す自信がない。

力を貸して悪い方向に行ってしまう気がする。

いざという時、なんとか力になってあげたい。

皆に罪悪感を感じて欲しくない。

僕はダメな奴だ。

僕でも出来る事がある。

ただ平和に生きたい。

例え死んでも人の役に立ちたい。

多分僕はいつか本当に狂ってしまうだろう、前世のこの記憶をただの『妄想』と言い聞かせている今もこれなんだ、認めつつある今の僕はきつと危ない。

いつそ二重人格なら救われたかもしれない、いや…そう思ったからダメな自分を演じて痛みから逃げているんだったか…。

やれるかじゃない、やる。なくても見つけ出す。一度決めたら迷うな。好きな物語の主人公の言葉だ、強くなるうと思っただけではなく、その決意があつたからこそ僕はまだ灘将臣でいられるのだと思う。

「アグスタ？確かホテルだったか？」

「そう、そこで行われるオークション、取引許可の下りたロストロギアをレリックと誤認してガジェットが来るかもしれないから、今回はそれらの脅威からの護衛が任務」

気になつてはいたけど取引されるロストロギアには大した力はなくて、ただの骨董品という事なのだろうか。

でも今より優れた技術で作られたものなら何かしか新技術発見の可能性がある宝物だよな、ちよつと興味あるなあ。

お金は、ないけど。

「だから今日は体をゆつくり休めて明日に備える事、いいかな？」

「……はい！」「……」

思わぬ休息時間の大幅アップに素直に返事をしてしまった。

そろそろ危険度が上がるだけあつて体は休める時に休めておきたい。

今日はいっぱい栄養をとつて何時もより早く長く寝よう。

「あ、将臣士長ちよつといいですか？」

「シャーリー……どした？」

「グラムの容量アップの件でお話が」

う……イーリスだけじゃとても魔法のプログラムは収まりきらない

からグラムにもかなり詰め込んでるんだよね、それでハードを最新版に改装して欲しいって頼んでいたんだった。

「明日までに終わるか？任務なんだよね」

僕の趣味は魔法収集と言う事になっている、理由はいつか全ての魔法を使いこなせる男になる為と断言した。それは無理だよと自分の嘘に呆れた。

「大丈夫ですよ、ちょっと預かりますね」

「じゃあよろしく」

飾り気のない銀のリングを左手から外してシャーリーに渡す、これがグラムの待機状態だ、因みにイージスもデザインは同じで色がブルーのリングだ。

「じゃあ四時間後くらいに連絡しますから」

「あ、いや明日の朝でいいんだけど」

「ダメですよ、しっかり点検しますが実際に扱って点検して貰いますからね！」

「…わかったわかった」

多少時間は減ったけど普段より休める事は変わらないんだ、ここはシャーリーの仕事の速さとこだわりに感謝しないとなあ。

それに明日はアグスタ警護か、ティアナちゃんが焦ってるようには見えないのは僕がいるからかな？才能がなくても連携や作戦でどうにかなる、助け合えるって思ってくれたのかな。

まあ…それでも僕は足を引つ張ってるにひ引つ張ってるから個人の役割の重要性に気付いたって可能性が互いかなあ。

「じゃあグラムをよろしく頼むよ」

「任せて下さい！」

兎に角明日はティアナちゃん達をしっかりと見ておいた方が良さそうだ。

第十話

思わず見惚れた僕の美的感覚は正常の筈だ。

地球のデザインとも六課の制服とも違う目の前のドレス、この任務がなければ僕は絶対に見られなかったであろう美女三人のドレス姿が目の前にあった。

「凄い似合ってますよなのはさん！」

「あはは、そうかな？ちよっと落ち着かない感じ」

スバルちゃんが憧れの人のドレス姿に目を輝かせていた、というよりも全員が三人のドレス姿に歓声をあげていた。

「じゃあ予定通りこちらは中の警備につくから、外は頼んだで」

あ…、固まっている内に三人が行ってしまった。まあ、褒めるにしても気の利いた台詞は言えないし、良かったかな。

「じゃ、配置に付きますか」

それにしても予想より配置場所がバラけるな…、シャルさんが感知してから合流出来る距離だけど、多方向から来られたら互いに援護出来る距離じゃないな。

シグナムさんにヴィータちゃん、二人が討ち漏らす数は少ないし、ザフィーラさんとシャルさんがいるから無理ではない計算なのか。ルーテシアちゃんが手を出さなければ余裕の筈だったんだな。

「将臣士長なにやってるんですか？」

「んあ？ああ、グラムのハードがバージョンアップしたからちよつと見てただけだ」

突然デバイスを振り始めたからスバルちゃんを驚かせてしまったようだ。

向上したのは魔法の処理速度とメモリ容量だけなのだけど、やっぱりなんとなく振って違和感を確かめたくなった。

「そうだったんですか。そう言えば将臣士長のデバイス、盾の方つてカートリッジが30発も込められるんですよね？」

「ああ、カートリッジ欲しくなったら分けてやるから言えよ」

イージスはマガジンが三つ差し込める、とは言え訓練でカートリッジロードを際立って多用する訳でもないので他人から見れば補給用に見えるかもしれない。

「あ、はい。その時はお願いします」

「おー」

スバルちゃんと雑談しつつグラムを数回振り、ちよつと体が温まった所でイージスに戻した。

そろそろかな？

オークション開始前にはガジェットが現れる筈だ。

（クラールヴィントに反応！ガジェット多数接近！）

「来たか」

すぐさまセットアップしたシグナムさんとヴィータちゃんが、反応のあった方向に飛んで行った。

本当ならルーテシアちゃんとガリューを押さえないけど、何分居場所がわからない。

地下駐車場に来るガリューを相手する事は出来るけど、下手に刺激してガジェットにガリューが加わった戦いになる事は避けたい。

「イージス、俺の甲冑を」

騎士甲冑、というよりは騎士服を身に纏う。エクシードモードと同じく僕の騎士甲冑には本来の姿があるが、なにぶん魔力が低く僕が維持出来る時間は短い、普段はこの継続時間重視の甲冑しか装着出来ない。

「よっしゃあ！気合い入れてくぞ！」

困った事になった、明らかに知る未来よりも状況が悪化している。

戦闘開始から十数分、ガジェットの動きがよくなった。ルーテシ

アちゃんが動き出したんだろう。

そして転送されて来た無数のガジェット？型、その中にミサイルを装備したガジェット？型が二機混じっていた。

きつと僕がいる事で、僕が知っている戦力より多くガジェットを投入して来たに違いない。人数だけでカウントすれば確実に戦力は増えているんだから当然だ。

兎に角こうなったからにはやれる事をやるしかない、リミッター解除も視野に入れて、今出来る全力を出す。

「シャマル先生の指示に従ってヴィータ隊長が来るまで凌ぐぞ！」

本来ここでティアナちゃんが反発する、でもこの展開は多少無茶しないと打破出来ない。明らかに？型は高火力、長距離攻撃仕様だ。

「でもこれ以上下がったらホテルが！」

「ロストログアをレリックと誤認してるなら派手な攻撃はしない！」

「そんな事誰が証明出来るんですか！？私達の仕事は逃げる事じゃありません！」

「逃げるとは言っていない！守りに徹するだけだ！攻めて抜かれたら終わりだぞ！」

エリオ君とキャロちゃんが来ない、何でだ？ガリユーと鉢合わせたのか？

将臣とティアナが念話ではなく、口頭で言い合っている間にスバルが突進した、恐らくは念話でティアナが連携を指示したのだろう。

「っ！馬鹿野郎！」

探り合いと睨み合いの均衡は崩れ、ガジェット？型がレーザーでスバルを狙う、ウイングロードで上空を駆けるスバル、囹役として敵を引き付けている。

（逃げ腰になったら終わりだ、私とスバルだけでもやらなくちゃ！）

四発同時ロードの誘導弾による多重弾殻射撃、ガジェット？型を先に片付ける作戦のようだが将臣は嫌な予感しかしていなかった。

「？型が動いてないぞ！スバル、ティアナ！AMF効果範囲が伸びるぞ！退け！」

今AMFを全開にされれば、まずスバルちゃんがウイングロードを失って敵のど真ん中に落ちる、幾ら防御が固いと言ってもバリアやシールドが使えたらの話だ、ティアナちゃんの砲撃魔法も、カートリッジの魔力制御に時間がかかっている、恐らく撃つ前に消されるか制御出来なくなるに違いない。

せめて自分は冷静でいようと思っていたのに、気付いたら走っていた、いつ走り出したのか自分でもわからない。

前回のようには放心する訳にはいかない、そんな気持ち先走ったのかもしれない。

「うあ！？」

「AMF！？この距離までっ！？」

将臣の視界の中でスバルが落下を始める、間に合ってくれと願ったティアナの射撃もやはりAMFの影響で不発したようだ。

「スバル！」

左手を突き出す、既にガジェットの影響が僕とスバルちゃんに始まっていたが、自分の防御よりスバルちゃんの救出しか頭になかった。

今の薄い騎士甲冑ではガジェット？型のレーザーですら貫通する、現に左肩に焼けるような痛みを感じる、それでもただ一直線に走る、縮められた一瞬に一生後悔はしたくない。

伸ばした手で作り出したのはチェーンバインド、AMFを発動するガジェットを拘束するのは無理だがスバルちゃんなら話は別だ。

「AMF範囲外に出てエリオと合流するぞ！ヴィータ副隊長がすぐ来る！」

「は、はい！」

落下中のスバルちゃんをチェーンで絡め取り、全力で引き後ろに投げる。身体強化とバインド持続にカートリッジを二発使った、すぐにこちらにも振り返り離脱を開始する。

「空牙！」

地面に衝撃波を打ち込み砂埃を巻き上げる、有人操作の今は動作は精密だが故に視覚に頼っている筈だ、自立稼働と違いたが見えない以上攻撃を少なからず躊躇する筈。

「ティア！」

「え、あ、私……」

「退くぞ！時間は十分稼げた！」

冷静になったティアナは僕が言っていた事を理解してくれたらしく、僕に対して初めてすまなそうな表情を見せた。

砂埃が拡散し薄くなるとガジェットがこちらに向かって飛び出してきた、兎に角？型のAMF効果外を目指し走っていた僕達はある程度距離が稼げていた。

時間的にもヴィータちゃんが来る筈だ。

そのままAMF効果外まで下がると、ほとんど同時にガジェット？型が空から降り注い小さな鉄球を受け爆発した。

（よし、間に合ってくれた）

残りのガジェットから僕達を守るように鉄球を打ち出した真紅の甲冑を纏った騎士が上空から降り立つ。

「無事かお前ら！？舐めた真似しやがって！行くぞアイゼン！」

ヴィータちゃんはそのまま攻撃を再開、実体弾とデバイスの物理

攻撃により瞬く間にガジェットを破壊し一掃した。

これがエースと呼ばれる者達の実力なのだと実感し、戦闘の終息に安堵した。

「おめーら怪我はねえな？」

「は、はい」

「エリオとキャロがないんだが？」

「安心しろ、ガジェットと戦ってたがザフィーラが助けた」

良かった、あつちにも転送されてたのか。

「お前らは引き続きホテル周辺の警護だ、あたしとシグナムは討ち漏らしがないか検索してくる。将臣はシャルの所で治療してもらえ」

「いや…俺の治療よりサーチ優先してくれよ、大した怪我じゃないからな」

肩と左足にちよつと傷を負っただけだし、最後まで気は抜かない方がいい。

「じゃあ将臣は応急処置してから復帰だ、いいな？」

「了解」

帰りのヘリの中でシャルさんから治療を受けた僕の傷は殆ど完治していたけど、六課に帰ってからメディカルチェックを受けるよ
うなのはちゃんからキツく言われた。

「そうだスバルには帰ったら飯奢って貰おう」

「え!？」

「ああん!？助けてやったるーが!」

何か言いたげだったスバルとティアナの出鼻を挫く為に、自ら話題を振る。

「俺が超ナイスなアドバイスしたのに聞かないしなあティアナは」

「う…」

ジト目で見るとティアナちゃんは恥ずかしそうに俯いた。

「流石前回それでビビってた奴の言葉は説得力があるな」

「いやあ今回も攻め込むなんて怖くてとてもとても」

グイータちゃんが冗談っぽく毒を吐いてきたのでそれに乗った。

じ、ジト目が皆から帰ってきた。

「ほ、ほら！あれだけ強いAMFだと俺やれる事逃げしかないし！
結果的にナイス判断だったし！大丈夫だよね!？」

「ふむ、まだ恐怖を克服する訓練は終わりそうにないな…」

え…あれはそろそろ、生傷が耐えないし。

「と、兎に角将臣士長ありがとうございました！助かりました！」

「私も…話を聞かず勝手な事してすみませんでした」

うう…こつやって真面目に謝られるのは凄く苦手だよ、やっぱりノリでは流せないかあ。

「まあ俺に謝るより次に生かそうぜ！その為の経験と訓練だろ？」

「それ昨日なのが言ってたような…」

フェイトちゃんなら気付いてくれると思ってた、フォローありがとう。

「それに…きっと明日からはなのは隊長に厳し〜い反省メニューが組まれるに違いない」

「あはは、私ってそんな風に思われちゃってるのかな？」

「あ、てかそれだと俺にも影響あるじゃん！」

なのはちゃん苦笑いしてるけど、事実絶対訓練メニューのレパトリートパターンは増えて行くと思うなあ。

AMFの脅威については今までかなり教え込まれたし、今回みた

いな状況を想定した訓練もあった。

今回ティアナちゃんやスバルちゃんがミスしたのは僕が原因でもある。

自分達がやらなくちゃいけないと思わせてしまった原因は少なからずあるし、守りに回るにしてももつと言い方があった。

「兎に角みんな任務お疲れ様」

事件の後処理ではないはやてちゃんに変わり、なのはちゃんが締めくり、僕達のアグスタでの任務は完全に終わった。

第十一話

念を入れて昨日に引き続き朝から医務室で僕はメディカルチェックを受けた。

正直シャルさんのメディカルチェックが一番緊張する。

体の蓄積ダメージなんかが見える可能性が一番高いからだ、とは言え毎回訓練で筋肉痛だとかまかしいる。

深く追求されないのは多分僕が『闇の欠片事件』でかなり痛めつけられた事を知っているからだ。

あの時は再起不能とまではいかないまでもかなりのダメージを受けた、特に即戦力である両腕のリハビリに苦労したし、治療やリハビリではシャルさんはかなりお世話になった。

「かなり疲れが溜まっているみたいね、訓練厳しい？」

「かなり、やっぱり若い奴には敵わないな」

「もう、アナタだっていくつも変わらないでしょ」

苦笑いするシャルさんに休める時にはゆっくり休むよう厳しく言い聞かされ、その後医務室を逃げるように去った。

時間的には余裕があったのだが、つい小走りで訓練場に向かってしまっ。

そして、訓練場には思わぬ人物がいた。

「え、なんで!？」

「なんでって…久々に会ったと思ったらそれですか」

ヤバイ今のはかなり素だった、六課以外の場所だったら確実にギンガちゃんと読んでいた気がする。

「なんでギンガがいるんだ!？」

考えられる事は何かの用事で来たか、知る未来より早く六課に向して来たかだ。

そうなると、ギンガちゃんももう出向してくる時期か、同じ部隊だから特に何もしなくても評価は底辺だよね……喜んでいいのかな？

いや…そうじゃなくて、明らかに少しではあるけど未来が変わっているって事には違いない。

「あ、ギン姉と将臣士長って同じ部隊なんだっけ」

「おう、後輩が自分より偉くなるのって結構キツいから、お姉ちゃんにこれ以上出席しないように言っといてくれ」

「聞こえてますよ将臣士長!」

ギンガちゃんは陸戦Aの魔導師、部隊では良く模擬戦をした。結果は言わずもなだけだね。

「挨拶も済んだ所で今日の訓練行ってみようか」

「ふふんギンガ、鍛えられてパワーアップした俺の力を…見せてやるんじゃないか！」

「はいはい」

「軽っ！年上だぞ！」

「階級は私の方が上です」

「嫌な姉ちゃんだなスバル」

「え？あ、そんな事は」

軽口を叩き合いながら朝の訓練は始まった。訓練メニューにギンガちゃんは驚いていたけど、やはりバテバテの僕を見て苦笑いしていた。

これまでの事件から考えると、やはり僕が知る未来とは細部が違う、分岐した未来の可能性が濃厚になってきた。

事件そのものは変わらないにしても、細かい戦力や人員の移動タイミングが違っている。僕が存在が展開を変えてしまっている可能性は否定出来ないものの、細部まで記憶通りに展開されるという考えは捨てた方がいい。

「ふっ！」

「見切っぐおあ！？」

ギンガの白いリボルバーナックルがイージスでガードした左手を弾き飛ばし腹部に突き刺さる。

リボルバーナックルの前面に魔力での膜が展開され威力が強化されていたらしい。

勿論初見の技ではないのだけど、以前とモーションや繋ぎまでの技が違い防御を誤った。

スバルちゃんやギンガちゃんの攻撃は砲撃魔法と比べて魔力ダメージより物理的ダメージが大きい、非殺傷設定とはいえ衝撃と痛みはかなりのものがある。

「…っえ」

「将臣士長撃墜、大丈夫？」

「ギリギリ」

判定役のなのはちゃんが僕の負けを宣言し目の前に降り立つ、朝食後だったら吐いていたかもしれない。

「じゃあ次が朝の訓練最後、複数のガジェットからの護衛を想定した模擬戦をやるうか。護衛対象は……将臣士長でいいかな？」

「意義なし！なのはさん愛してる！」

なんだかちよっと寒気を感じた、調子に乗りすぎたかなあ…。

多分僕がへばっていたからと言う理由プラス、実際に足手まといになる可能性が最も高いから護衛対象に抜擢されただろうな。決して好きじゃない相手に親身になったり、差別や雑な扱いしないこの部隊とメンバーには本当に驚かされる。

「抵抗はしていいんだよな？」

「勿論、自己の判断と護衛との連携も任せるよ」

とりあえず訓練で連携だけはマシになったから目立ったミスは最近ない、連携しなかったら毎回撃墜されて終わってると思うし。

まあだからと言って僕の実力は相変わらず底辺な事には変わりない。

「みんな気合いいれて俺を守るんだぞ！」

僕を守るって訓練に皆のモチベーションが上がるのかどうか、非常に疑問ではあった。

現在僕は久々に私服を着ている、遂に原隊復帰を命じられた訳じゃない。六課所属初の休日だ、ずっと24時間勤務だったので初の外出でもある。

思わぬ休日に皆驚いていた、1日何をするかあれこれ話し合っ

いた。

いつ休みになるかハッキリした日にちは分らなかったけど、僕は休日の行動を前々から考えていた。

ヴィヴィオちゃんを保護するエリオ君とキャロちゃんの近く、市街を見て回るつもりでいる。流石に尾行までするつもりはない。

ま、まあ兎に角出遅れない位置にいるのが予定。今回は前回より更に危険が高い、ナンバーズが出て来る上にヘリも狙撃されるからだ。

なのはちゃんが間に合わなかったらヘリは撃墜されるし、フォワードの皆もルーテシアちゃんとの戦闘がある。

今の所単純に考えれば良い方向に向かっていると思うけど…何がきっかけで取り返しのつかない事になるか分からないし…。

「あ…時間ヤバいな」

僕は今回協力を依頼した人物との待ち合わせがある為、行動開始はエリオ君やスバルちゃんよりも早い。

移動手段はバイク、車の免許もあるのだけど肝心の車を買う余裕がない。

「お？それ将臣のバイクだったのか」

「なんだヴァイスか」

「何だとは何だよ！」

僕のバイクは中身こそミッドのものと差異はない、ただデザインやタイヤ形状が地球の方が好みだった僕は外観とタイヤを地球のものに変えている、一応法律の範囲内の改造だ。

ヴァイス陸曹は入局やら年やら階級差で接するべきか悩んだ結果、互いにタメ口で話すようになっていた。

「悪いけどバイクの話はまた今度な、人と待ち合わせしてるんだ」

「何！？まさか女か？」

「じゃあまたな！」

アクセルをひねり一気に整備工場を飛び出す、あのまま行くと外出するタイミングを逃してしまいそうだったのでやむ終えないだろう。

時間的にはギリギリ間に合う筈、お願いだから道が混んでいませんように！

急いでいる時こそ冷静に、無理な運転はしない！そう焦る自分に言い聞かせながら目的地に向かった。

……

……

…

「…セーフ、だよな」

「アナタは急に誘っておきながら遅れてくるんですね」

「ごめん…なさい」

腕時計を確認すると僕が指定した待ち合わせの時間から10分も経っていた。

「時間もないのでしょうか？移動しながら言い訳は聞きます」

「本当にすみません」

今回協力を依頼した女性は何を隠そう僕がBランク認定試験のペアド、現在は空戦のランクSを取得して地上本部で勤務している。

名前を…

「バイクですか…」

「ごめん、言い忘れてた」

「今回はちゃんとあの変なキャラではなく、本来のアナタで対応しているのですぐに見ます。スカートも予想して避けましたから」

「助かるよ」

彼女との付き合いは結構長い、結構というか…累計時間はトップかもしれない。

ヘルメットを渡して彼女がバイクに乗ったのを確認してから改めて走り出す、目指すは市街。

「で、どういう心境の変化ですか？私に頼るなんて」

「未来が分岐しているのは確かだからね、良くする事に力を注ぎたいんだ」

「今までもそうして来たのでは？」

「今まではなるべく本来の流れのまま進行してくれるよう見守っていたただだよ」

念話のおかげで走行中でもしつかりと会話する事が出来る、腰に回された手が凄く気になるのはきっと事故ると自分だけではなく同乗者も傷つけてしまうからだと思う。

「それにしても明らかに所々手を出してしまっているようですね、その場のテンションや気持ちを優先させてしまうなら道化を演じる意味をかんじませんか」

「う……そりゃ僕も人間だし、つい感情に任せた行動とかしちゃう時もあるけどさ」

後々考えると自分でも『なぜ？』と思う行動をとっている事は確かだ、ずっと同じ考え、ずっと同じテンションでいられる人間は多分いない。

どんな人間にもブレはある、そのブレをいかに小さく出来るかで人格の中心、人の心が決まるんだと思う。

「それで開き直って助力を得る事にしたと」

「六課やスカリエツティ側に急な戦力の増減をさせない範囲なら未来は全く違う形には分岐しないと思うだ」

例えばヴィヴィオちゃんを死なせてしまったり、ナンバーズの誰かを今回捕らえたりすれば大きく未来が変わってしまうだろう。

だから被害の軽減に留めれば未来のブレは少ないと思う。

と言うよりは今回ヘリの狙撃という、明らかに人の命が狙われる事態に僕がビビっている。

「協力を要請された訳ですが、それは命令ですか？」

「いや…命令なんて出来る立場じゃないよ」

「私はアナタの融合騎です、命令するのは当たり前前の事では？」

うう…何でこうなんだろっ、僕はそんなつもりじゃないんだけどな。

「融合騎でも、命令を聞く理由にはならないよ。自由に生きて欲しいって前に言っただよね？」

「ではそのように…。しかしアナタも本当にヘタレですね。主であるなら私に好きに命令出来るというのに自由を与え、自由にさせたと思えば協力して欲しいと頭を下げる」

そりゃ…だってそんな奴隷みたいな真似誰だって嫌じゃないか。

「良い事をしていれば全て丸く収まる訳ではありません、どこかで妥協しないと八方塞がりになりますよ？」

「そうかもしれないけど、僕はやりたい事をやっているだけだから」

「分かりません、アナタが何を考えているのか、アナタがどうしたらアナタ自身を大切にしてくれるのか、分かりません」

第十二話

「新人達は休みでもお前に休みはなしか」

「仕方ないよ、それに皆頑張ってくれてるから」

「今やっているのは教導メニューか？」

「うん、ちよつと修正中」

今私がやってるのは将臣君の訓練メニューの大幅な修正、能力値が平均よりちよつと低い将臣君だけど、デバイスの映像で見たアグスタでの頭の回転の速さは平均以上だった。

（やっぱり将臣君も場数を踏んで来てるんだもんね。なのになんであんなに普段ふざけてるんだろう）

訓練自体にはしっかり参加してくれる、でも時折明らかに私達を遠ざけようとしているように見える、それも将臣君がそれを望んで…。

寂しい目じゃなくて、力強い目で私達から離れようとする。ずっとその理由を聞きたいと思っているけど、将臣君がそれを聞かないで欲しいと思っている事もわかるから、将臣君のするがままに流されてしまった。

私の記憶にある将臣君は努力家で、真面目で、人に迷惑や心配をかける事が凄く嫌いな男の子だった。

将臣君が変わったのは私が魔法と出会った時と殆ど同じ時期、その頃から私を避けるようになった。

友達でも他人でもない距離を続けて、それでも私から完全に離れて行く事はなかった将臣君。

悩んでいる、でもそれは私が聞いてはいけない悩み。いつか将臣君から話してくれるのかな…

「高町？」

「あ、ごめんシグナムさん！」

「上の空だったけど、何か心配ごとか？」

「う、ううん！大丈夫ちょっとメニューで悩んだだけだから」

ぶつかって行けないもどかしさはあるけど、それなら私は将臣君を鍛える自分の役割に専念しよう、きつと無駄にはならないし、お互いに踏み込むきっかけがいつか生まれるかもしれない。

「そうか。将臣の体力の無さはあまり責められんが…動体視力は問題無さそうだし、私との訓練で時折当てる気で振った木刀を避けるかな」

「と、時折って…」

「ああ…最初の一回は主に呼ばれ単純に手元が狂ってしまったんだが、その時に太刀筋を見て避けていた。まあ三回に一回の割合で当

たるかな」

訓練前に良く将臣君が鼻血だして来る理由がわかったの…。

「で、どこに行くつもりなのですか」

「…よ、予定は未定です」

市街での行動は決めていたけど、当初は一人で適当に時間を潰すつもりでいたからどうしたら良いか分からないぞ。

「最低ですね」

ぐ…だって女の人と出掛ける事なんてないし、昔二人で地球にいた時は買いたいものがあるから出掛けてただけで、人を楽しませるプランなんて僕には思いつかないよ。

「映画…とか？」

「呼び出しがいつあるか分からない状況ですか？」

「朝ご飯は…」

「済ませて来ました」

なんかちよっと怒ってるなあ…。

「そうですね、久々にあったのですからどこかでゆっくり話しましょう」

「あ、じゃあ喫茶店でいいよね？」

「はい、女性にリードされてしまうアナタの相変わらぬの名前負けっぷりに安心しました」

それは言わない約束だつて…言つたのに！！

僕の将臣と言う名はちよつと変わっている、將に仕える者という意味が込められた名前だ。なんでそんな意味を込めたのか知る術はない。

ただ彼女には昔から將（王）の家臣なのに王（自分）を家臣にしているとか、仕える事前提の男にしては鈍くて名前負けしてるといじられる。

でもきつとこの名前は良い將（上司）と臣（部下）、簡単に言えば良い仲間に囲まれますようにと言う意味で付けられたんじゃないかとも思っている、ちよつと無理やりかもしれないけどさ。

雑談しつつバイクを走らせる事五分弱、喫茶店を見つけた僕達はバイクを停め入店する事にした。

「アナタとの主従関係の破棄に伴って私は自由の身になった訳ですが」

「ずっと前からそう言ってたよね？て言うか念話で話そう？ね？」

し、視線が…周りからの視線が。

「念話でも構いませんが、喫茶店でただ向かい合って見つめあっている私達は周囲から浮きますが…」

「やっぱり普通に話そう」

では、と断ってから彼女は言葉を紡いでいく。

「変身魔法も解除しますし、恋愛なども自由という事で良いんですね」

「……変身魔法は、ちょっと…色々マズい事になりそうだし」

絶対「あれ？もしかして姉妹か何かですか？」って事になるよ、目に見えてるよ。

「勝手ですね、それに恋愛の方は無視ですか…そうですか」

「いや、ほら…そう言うのは個人の意志を尊重したいし、個人の自由だし」

命令は嫌だ、でも自由にした相手に無理をお願いしちゃうのがへタレって言われる由縁なんだろうなあ。

「……」

「……えっと」

なんで無言なんですか？

「答えはNOです」

そう言って変身魔法を解除した瞬間、喫茶店の中がざわめいたのは僕の聞き間違いではないだろう。

素顔を知っていた僕でも心臓が一度大きく鼓動した程だ。多分返答と行動に驚いたからだと思う、思いたい。

彼女との出会いは約十年前、『闇の欠片事件』の時だ。

既に満身創痍だった僕は、一番相性の悪いであろう相手との遭遇に半ば投げやりになっていた。

護衛を必要としない高火力、高防御力の砲撃魔導師。どう接近するか、どう守りを突破するか考えを巡らせたけれど、残された選択肢は玉砕覚悟の特攻しかないように思えた。

王のマテリアルは広域戦闘タイプだった事もあり、詠唱の隙を与えない手数とクロスレンジの戦闘に持ち込む事で辛くも勝利を得た。

今回は万全の状態でも1チャンスがあるかどうかの相手、傷付いた僕は近づく前に撃墜されるとしか思えなかった。

しかし、砲撃は来なかった。自我を持ちつつも素体達の記憶も持つ彼女は僕に罪悪感を感じていたようだった。

自分の思念体が生まれてしまう事を危惧し、闇の書事件の際は関わらずにデバイスを入手するという大決断をしたのだけど、結界内

に入った事で記憶が少なからず読み取られたのかもしれない。

彼女の謝罪の言葉、それを聞いていられなかった僕は精一杯自分の過ちだと語り、謝罪した。

夢が覚めたらと嘘をつき、心の中で騙している人達にいつか全てを話、嘘と身勝手を償う事を約束しながら彼女を斬った。

理解者を得、失った瞬間だった。

二体のマテリアルの消滅を感じ取ったもう一体のマテリアルと戦いなくなったのはすぐ後だ。

あちらも誰かと戦ったのかダメージはあった、肉を斬らせて骨を断つ、そんな気持ちで挑んだ僕だったが殆どダメージを与えられず、シグナムさんに助けられなければ死んでいただろう。

問題が起こったのは事件が終わって一週間後の事だ。

自分以外誰もいない部屋、どの部屋をどの時間に探そうとも家主は僕以外はいない。

自分でいられる空間なのに、そこは凄く虚しくて、何よりも寂しかった。

治療を受けたとは言え日常生活も満足に出来ない僕は、戦いの日から家の外には一切出ず殆ど眠って過ごしていた。

ただでさえ人より時間を切り詰めて自分を鍛えなくちゃいけないのに、流石に鍛える余裕などある筈もなく、日ごとに衰えていくような不安と傷の治りの遅さに一人荒れていた。

本来ならシャマルさんに来てもらい、定期的に治療を受けるべきなのはわかってはいたけど、リインフォースの寿命を考えると自分の治療に時間を割いて欲しくなかった。やっぱり家族は一緒にいるべきだと、そう思った。

「あ……くそ！……ぐっ」

ギプスで固定された手からドリンクの缶が転げ落ち、それを苛立ちに任せて蹴り飛ばす。

ドリンクの蓋も満足に開けられず、少し動かしたただけで悲鳴を上げる体に苛立つて、良く物に当たり散らすようになっていた。その度にまた体が悲鳴を上げ、傷口が開いてしまふとわかつているのに、ここでは誰にも自分を偽らなくて済む油断と、一人という状況が感情に任せて僕を動かした。

唯一の話し相手であるイージスも大破し、修理と調整の為にアースラに預けてあった。それが原因と言うのは卑怯だけど、慰め励ましてくれる存在のいない僕の部屋は僕の八つ当たりで荒れ放題だった。

「うゝ あああああ！！あゝ ああああっ！」

騎士としての、そしてこれからの自分の生命線である右手を壁に叩き付けようとした時、自分以外誰もいる筈がないこの確かに声が聞こえた。

「やめて下さい」

確かにそう聞こえた気がして寸前で拳を止めた、殴りつけていないのに、振った衝撃だけで僕は痛みに膝をついた。

「誰か…いるの？それとも前世の記憶の次は、遂に幻聴まで聞くようになったのかな？僕は」

寝よう、起きていると頭がどうにかなりそうだ。もしかして夢でなら、少しはマシな気分を味わえるかもしれない。

「幻聴ではありません」

声、いや、直接頭の中に響いてきたその言葉に慌てて辺りを見回した。当然だ、聞き間違いでなければ今の声はなのはちゃんのものだったからだ。

一応全ての窓や扉には鍵をかけていたのだけど、物音を聞いて入ってきたのかもしれない。

「なのは？なのはなのか？」

マズい台詞を口走った、そう思った僕は慌てて自分を偽り始める。

「……違います、私は…」

左手の銀色の腕輪、ストレージデバイスである『グラム』から声が聞こえてくる事に、その時ようやく気付いた。

「そんな…だってグラムはストレージデバイスで」

一瞬、グラムにはAIが積まれていないと、そう言おうとしてし

まった自分が酷く残酷な人間に思えた。

「確かにこのデバイスはストレージデバイスそうですね、それに私は一時的にこの中の空間を使わせてもらっているに過ぎません」

「なら君は…誰？」

「覚えていないのですか？まだ夢を見ているのですか？仲直りする約束をした筈ですが…なら今日を覚ましてあげましょう」

グラムが光り輝き、その光りの先にはっきりと人影を見た。声を上げるより先に、顎に強い衝撃を受けて気を失った。

「とりあえずアナタには睡眠が必要です」

薄れ行く意識の中で確かにその言葉を聞いた。これが僕と彼女の二度めの出会いであり、消滅する筈だった彼女が斬りつけたグラムの空き容量に自身をコピー保存、闇の書の防衛プログラムの構築体、マテリアルとしてではなく。

自身の基礎構築データと、融合騎としてのプログラムだけを選び抜いて、僕のついた嘘を律儀に実現する為に、彼女は生まれ変わってまで会いに来てくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4915y/>

機動六課のお荷物

2011年11月20日08時20分発行